
レジナレス・ワールド

新羅三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジナレス・ワールド

【Nコード】

N7503Y

【作者名】

新羅三郎

【あらすじ】

強くてニューワールド。VRMMO「レジナレス・ワールド」プレイ中にいきなり意識を失ったシュウとサラ。気がつくと、ゲーム世界そっくりな「現実」に放り込まれて。ゲーム時と同じ能力を持ちながら旅する二人の間に、人化する銀魔狼、ハイエルフの美姫らが割り込んできて

「うん」

はるか地平線が春の陽気にかすんでいる。そこにさわやかな風が渡っていく。

そよぐ風が美しい新緑の草を揺らし、彼の頬ほほをくすぐった。

気持ちよさとくすぐったさに目覚めると、隣から、同じような声を上げる女性の声が聞こえ、たのなかしゅう田野中修の意識は、一気に覚醒する。

寝ころんだまま横を見ると、そこには、良く見知った美しい女性の顔があつた。

「あれ？サラさん？」

「ん…シユウくん？」

シユウの家の一階上、同じマンションの住人である。シユウより2こ上の二十歳。

美しいナチュラルウェーブのあわい金髪は、普段は無造作に束ねられているが、降ろすと腰まであるほどに長い。今はなぜか降ろしている。

瞳は透き通るように美しいブルー。光の加減で美しく変化し、見るものを魅了してやまない。

北欧系の大柄で整った肉体。

日本人の男の眼を釘付けにするほどの大きさを誇る美しく形の良い胸、その下になだらかなカーブでくびれていく腰と、そこからふくらんでいく発達した骨盤にあわせた肉付きは、彼女の造形を一目見ただけですべての男に強烈に印象づける。

それでいて年齢がわかりにくいほどあどけない表情をするので、整いすぎた彫りの深い美しい顔なのに、少しも冷たい印象を与えない。

本業のモデルであるふたつ上の彼女の姉のユリアは、普段から冷

静で無表情で、さらに整った容姿と美貌を誇っているため、一種近寄りがたい偉容だが、サラは、豊かな表情がとても魅力的で、シユウにとつては、サラのほうがより異性として惹かれるタイプだった。

二人は、草の上で仰向けの姿勢で顔だけ動かしお互いの姿を確認し、それぞれひじで上半身を起こしあげる。

サラの眼が、シユウの顔から、すっと下半身のほうに流れる。

その目線に応じてシユウも、自分の下半身に。

「きゃっ！」

サラが思わず悲鳴を上げる。それはほんの小さな悲鳴だったが、シユウの意識を一瞬で沸騰させるに充分だった。

「なっ…！えっ！えっ？」

何一つ身につけていない生まれのままの姿。目覚めの瞬間の男性特有のあの状態になっっていなかったのは幸か不幸か？

シユウは飛び起き、いわゆる体育座りで股間を隠し、両手で出来るだけいろんな物を見えないようにガードしてみた。

そして、固まってるサラをみる。

顔から、胸、そして……。

青ざめたシユウの顔がみるみる赤く染まっていく。

その視線に気がついたサラが自分の姿に気づく。

「あ……っ、ごめっ」

「いやっ！」

とっさに左手で胸を隠そうとするサラ。だが、胸に巻き付けた左手が、サラの大きすぎる胸の形を複雑に変えることで、むしろ男にとつては『眼に毒』な事になっていく。

「さて」

ほぼパニック状態と言つていい二人の精神に冷や水を浴びせるほ

どに冷静な、だが威厳に満ちた男性の声が、二人の正面から発せられたことで、この、不可解で、あり得ない状況に変化が生まれた。

「田野中修、サーラ・ヨハンセン。落ち着いたかね？」

二人の目の前に、青白く光る直径5cm くらいのガラス玉のようなものが浮かんでいる。

そして、どうやらそれが「しゃべって」「いるらしい。

その声は、どうもある程度年配の、男性のような響きだった。

「まず、二人に詫びねばならぬ事がある」

それは、存在するだけで二人に威圧感を与え、興奮を沈静化させるに充分だったが、その詫びの言葉がきっかけになって、二人はやっと硬直から解き放たれた形になった。

「君たちは、今ここで目覚める直前、何をしていたか覚えているだろうか？」

「…ゲームを、してたと思います」

とまどいながらシユウは答えた。眼をあわすと、サラも小さくうなずいた。

VRMMO。21世紀中頃に急速に発展したヴァーチャルリアリティ技術を応用した体感型仮想現実装置をつかって、オンラインでプレイできるロールプレイングゲームの一種。

神経パルスを模倣することで、ある一定のレベルまでは五感をだまし、プレイヤーによりリアルな娯楽を提供するそのゲームは、急速な普及によってコストが下がると同時に、かつてない規模の市場を形成していった。

意外にもお互いが知らなかったが、二人は、『レジナレス・ワールド』というMMOに参加しているプレイヤーだった。

「そうだ。二人とも、感覚的には、つい今しがたまで、自分の部屋でゲームをしていたと感じておるであろう?」

二人は小さくうなづく。

「君たちは、意識を失った瞬間に、事故にあった　我々のミスで」

要を得ない説明を総合すると、シユウとサラは、なんらかの理由でこの世界に『存在』することになってしまったようだ。

その理由も、意味も全くわからない。何を聞いても、この目の前の玉は、詫びるばかりで理由をいわない。

ただ、この世界はレジナレス・ワールドに違いなく、そして、二人はここに存在すること。そして、元のレジナレス・ワールドと違い、ログインしているVRマシンはないことはわかった。

「私たちの装備はどうなったんですか?」

サラが尋ねる。さすがに、全く意味もわからない上、丸裸にされ、なにも荷物も無しにこの世界に放り出されれば。もし、レジナレス・ワールドの中というのなら、一晩で命はないだろう。

「ああ、すまない。君たちの荷物は、概念上の　ステータスとあったか?その中にすべて収められている」

二人は、それまでプレイでやっていたように、ステータスを開いてみる　あった。

だが、あったのはアイテムガジェットのみで、ステータスパラメータや、装備画面は見あたらない。

「これ、どうやって装備するんですか?」

シユウは尋ねてみた。

「取り出して、自分たちで着用してくれ」

「へえ、リアルですねえ」

シユウは、視点移動でアイテムを選択し、取り出してみた。

とまれ。

目の前に、選択した装備

侍の羽織袴が現れた。

ふわり、と目の前に浮かび上がり、手に取った瞬間、ずしり、と重さが加わる。なかなか便利なものだ。

同じように、草履・刀と、アクセサリであるすばやさの指輪と陣笠を選び、早速着替えてみた。

何となく見てはいけないような気がして反らしていた視線をサラに向け、ちらっと盗み見る。

ほっとするような、残念なようなところだが、サラはすっかり、美しい白銀のプレートメイルにブーツ、そしてふた振りのレイピアを腰に佩いていた。

シユウと視線が合うと、ちょっと照れたようにはにかんだサラ。それを見て、また真っ赤になってうつむくシユウ。

「ところで、ステータスがきちんと機能していないようですか？」
サラが光の玉に尋ねてみた。

「そうだ、残念ながら、この世界は、厳密にはゲームではない」
光の玉は、とんでもないことをいいだした。

「君たちは、この世界で、今まで過ごしたように生きていけるだろう。だが」

光の玉は、また衝撃的な事実を伝えた。

つまり、この世界は、二人にとって現実そのものであり、パラメータなどで計ったり見たりすることの出来ない「リアル」であると。「君たちの『死』は、そのままの命の終焉だ。そして、君たちが何かの命を奪えば、それらもまた、『死』を迎えるであろう。これはゲームではなく、復活点などもない」

「そ、そんな！」

「その事実を知っているのは、この世界では君たちのみだ。我々は、この世界を守り、維持はするが、手出しはしない」

「冗談じゃない！あんたらのミスだろ。俺たちがなにしたらってんだよー！」

「そつだ、我々のミスだ。そして、我々に出来る、これがすべてだ。後は君たちに任せよう」

「お、おいつ！」

目の前の光の玉が徐々に薄れていく。

「時間が来た。君たちの行く末に、幸多からんことを……」

唐突に消えた光の玉が去ったあと、二人はしばし呆然と草原に座り込んでいた。

全く意味がわからない。

ほんの一瞬前、プレイ中だった二人は、目の前が暗くなったと思ったら、すでに全裸でここに横たわっていた。少なくとも、そうとしかいいようがない。

「ステータス」

シユウはふと思いついて、ゲームシステムの確認を試みた。みた。

やはり、ステータスにはアイテムガジェットしか存在しない。

アイテムをすつと確認していくと、なぜだか一番下に、金貨や銀貨が入っている。

これもあり得なかった。

所持金は普通、個人ステータスの上部に表示されている。

その個人ステータスが存在しない。

「システム」

環境設定やログアウトを管理するガジェットを呼び出そうとした。

しかし、全く無反応だ。

「サラさん、どうです？」

シユウは、サラにも同じ事やってみてもらってみた。

だがやはり、お互い何をやっても、開くのはアイテムガジェットだけのようだ。

後々、このアイテムガジェットと中身だけでも、この世界では大変な恩恵だったと気がつくのだが、まだ、この混乱の中の二人にとっては、それどころではなかった。

一通り試すことを試し終わると、二人は草原に並んで腰掛け、また呆然と空を眺めていた。

風はひどく心地いい。

若草を揺らしながら、風はなだらかな草原を駆け下りていく。

ふと見上げると、うすい白い雲が、奇妙なほど速く流れていく。

(こんな状況じゃなかったら、本当に最高なんだけどな)

シユウは、そう思いつつ、ちらっとサラを見てみた。

そのシユウの仕草を感じ、サラは、ついに耐えかねて泣き始めた。

「うっ…うっ、ふっ」

訳のわからない不安さ。だが、この感覚は　　すくなくとも、

この五感に感じる生々しい現実感は、二人がここに放り出された事実をなにより雄弁に肯定している。

ふとシユウは、先ほどの光の玉のように、サラまですつと消えてしまうような恐怖感と孤独感に襲われて、泣いているサラの頭を抱き寄せた。

ほんの一瞬、驚いたようにシユウの顔を見上げたサラは、今度は自分の意志でもう一度シユウの胸に顔を埋め、声を殺し、肩をふるわせて泣いた。

「さて、ごめんなさい」

サラの顔は腫れ上がってひどいものだったが、しばらくするとだいぶ落ち着いたので、「えへっ」とした表情を作ると、シユウの体から身を起こした。

「ところでシユウ君、レジナレスやってたのね」

「サラさんこそ。意外ですねー」

幼なじみというほどでもないが、お互い、同じマンションの上下階室ということもあり、家族ぐるみで見知った仲ではある。

今どきの男の子であるシユウがゲームにハマるのはともかく、サ

ラは、これほどの美貌の女子大生だ。正直、あまり熱心にゲームにこだわるようには思えなかったので、意外な一面を見た気がする。

「うん、学校の、友達がね、すごい娘こがいるの」

サラは、仲の良い同級生に誘われて、興味半分にはじめたらしい。そこで、その友達と一緒に行動するうち、みるみるうちにレベルは上がり、装備は整い、そして、ゲームの要領をつかんでいくと、あつという間に頭角を現していったようだ。

つまり、

「ハマっちゃったんですね」

くすりとシユウが笑うと、サラは、むーっと頬をふくらませた。

「シユウ君は？」

「俺も似たようなもんですよ」

シユウも同級生にかなり熱心に勧められた。

まあやつぱり、評判の高いゲームだったし、シユウも人並みに興味があった。

VRは、意外なツテを持つ父親が買ってきてくれた。

兄は大学進学で一人暮らしをはじめていたので、シユウは部屋にVRを設置してもらい、レジナレス・ワールドにどっぷりはまりこんでいた。

「ところで、その格好、聖騎士ですか？」

「うん。二つ名もあつたんだよ」

「えっ、それは……すごいですね」

女の聖騎士で二つ名。何となくぴんと来たシユウは、

「もしかして、舞姫ですか？」

即座に浮かんだその名を聞いてみた。

「えー、なんでわかるの？」

照れくさそうに、サラははにかんだ。

「いわれてみればサラさんのイメージですし……僕にも二つ名あつたんですよ」

サラにいうと

「ちょっと待ってちょっと待って。当てるっ」
サラは眼を輝かせながら、シユウの顔をのぞき込んだ。
こんな状況なのに、シユウはその表情にかなりうるたえた。

「黒竜殺し?」

「よくわかりましたねー」

「シユウ君の今の格好」

「ああ」

ゲーム上ではお互い、分身を使っているから、ここでこうして名乗りあわなければ、まず知るよしもなかっただろう。

ちなみに二つ名は、特定のクエスト一番乗りの証であり、その中でも、止めを刺すなどのフラグで獲得するものだけに、強さだけでなく、チーム力や運も関わるトロフィーになっている。

舞姫は、都市を襲うモンスターの大量のイベント時に、最も大量のキルを獲得した一人に贈られたはずだった。女性なので「舞姫」。剣舞のことだ。

黒竜殺しは、その名の通り、ブラックドラゴンスレイヤーに贈られたトロフィーだ。

ドロップは、所属チーム　ギルド単位で受け取れるが、二つ名の称号は、一人に限ることが多い。

黒竜殺しは、止めを刺したプレイヤー限定。だからずいぶんやかまれたり、からかわれたりしたものだっただけ。

シユウがレジナレス・ワールドにハマれたのは、試験休みから夏休みにかけての期間だった。

さすがに2学期が始まると、それまでのようなギルドチーム前衛でフル稼働、とも行かず、やむなくジョブチェンジをして、わずかな時間に『生産職』を楽しむスタイルに切り替えた。

一応、エスカレーターで進学が決まったシユウだったが、2学期の

成績も無視できないため、春まで廃人プレイはお預けだったのだ。

一方、舞姫は、ほんの一週間くらい前だったはずだ。そう尋ねると、サラは自慢げに胸を張った。

「イルスヴァニア防衛戦よ」

「すごいですね」

シユウも噂は聞いていた。

トップギルドのひとつ「光の楯」が、街に向かって突進する魔物の群れに呐喊して、魔物撃滅の橋頭堡になったという。

その中でも、舞姫は桁違いのキル数を稼ぎ、運営表彰の形で名前が付けられたという。

「もちろん、ギルドの力だけだね」

サラはいうが、そうではないだろう、それだけじゃないのはシユウには手に取るようにわかった。

こんな雑談でも、二人の心は、なんとか動き出せるほどには軽くなかった。

「サラさん、ちょっと動いてみましょうか？」

「そうね、状況もわからないし、出来たら、街を探したい」

お互い、同じ懸念を抱いていたようで、ほっとする。

さすがにこの状況。もしここがレジナレスだとしたら、二人つきりて野宿は、どうしても避けたいところだ。

立ち上がったシユウは、サラに手を伸ばす。

自然な振る舞いでその手を取って立ち上がると、サラは、またはにかみながら

「ありがとう」

とシユウにいった。

とりあえず二人はあたりを見渡す。

まず今の位置に心当たりはあるのか？

「シユウ君、ここ、見覚えある？」

「いいえ、来たことない気がします」

なだらかな斜面になっていいる草原、太陽の位置から考えると、斜面は北から南に向かって下っていて、反対側には森がある。

さすがに状況がわからない段階で、森にはいるのは避けたいので、とりあえず、下ってみよう、ということになり、二人は歩き出す。

今見えている地平線は、おそらく5km ほど先だろう。5km ということは、あそこまで行くのに1時間半くらいかかることになるか。

シユウは大まかに計算した。

「どうして僕が『黒竜殺し』だったんですか？」

沈黙を恐れるように、二人は歩きながらとりとめもなく話す。

「だって、黒衣の『侍』でしょ？」

「ああ、なるほど」

二つ名持ちは、正式サービス開始から3ヶ月で、20人くらいだろうか。

大体ジョブによって格好が決まってくるし、それぞれ好みの色があるので、そういった情報は掲示板などでわざわざ話になっていたりする。

「それにしてもサラさん、その格好似合ってますねー」

シユウは、横に並ぶサラに心からそういった。

サラはシユウより頭ひとつ以上長身だ。

そして、足も長い。シユウの腰近くにサラの股の付け根があり、微妙にシユウの劣等感を刺激する。

「ふふ、ありがとう。シユウ君も似合ってるよ、侍」

「ええー？そうですかねえ」

シユウは自信がない。まあ普段袴など穿かないので何となく落ち着かないのだが、そういえばずっとゲームでは袴だったな、と思うと、さほど違和感もなくなってくるから不思議だ。

履き慣れないといえば、足袋と草履のほうがやはりまだ馴染まない。

「いつそ、靴にしようかなあ」

シユウが愚痴ると

「ええー、ダメよー」

サラがなぜかニコニコしながら不満を漏らす。

「だって、すぐくサマになってるよシユウ君」

「歩きにくいし、地面平らじゃないから時々痛いんですよ。ごめんなさい、やっぱり靴にします」

「ぶっ」

サラがかわいくふくれるのを見て、シユウは苦笑しながら、ステータスを開き靴を選択する。

移動力補正のある靴はレジナレスでも人気のアイテムで、シユウもちゃんとアイテムにストックしてあるのだ。

履き替えて歩き出す。最初は単に歩きやすくなっただけかと思っただけだ

「サラさん、早足の靴持ってます？」

「あるよ？」

「ちょっと履き替えてもらえますか？」

サラにも履いてもらい、様子を見る。

「うわ、これ効果あるわね……」

そうなのだ。どうやら、魔法効果の装備品は、はっきりそれと体感できるほど効果がある事がわかった。

「ほんの気持ちですけど、楽になりましたよね」

「そうね。でもそうしたら、ネックレスとかピアスとか指輪とかも、ちゃんと装備した方がよさそうよね」

サラがふつと漏らし、憂鬱そうに顔を曇らせる。

そう近くない先に、遭遇するだろう、魔物との戦いを思い、気が重くなっているのだろう。

「そうですね、ちょっとこの辺で、装備をちゃんと見直しましょう」
二人は立ち止まり、アイテムを漁ることにした。

二人の所持品をあわせると、現時点で最適と思われるのは、ステータス異常回避の指輪、ゲーム内では防御力+10だった護りの指輪。魔法回避のネックレスなどが効果的だろうと思えた。

また、シユウにはないがサラはピアス穴があるので、耳に魔力増強のピアスを付けた。

腕輪のたぐいも、素早さが上がる腕輪を両腕にはめた。

また、武器防具のたぐいも見直してみた。

シユウは、侍クラスだった頃のベスト装備だったが、サラは、聖騎士の重装備である両手剣を使用するので、レイピアをしまい、現時点で持つ最高の剣、ドラゴンスレイヤーを左腰に佩いた。

さらに、炎属性のナイフを、右の尻あたりに邪魔にならないように下げた。

ちなみに、シユウの装備する日本刀は、無銘ではあるが、炎属性+3が付与されている。脇差にも、風+3という贅沢なものだ。

装備を調べて、二人はあらためて南下を再開する。

2時間ほど歩いただろうか、行く手に川が見えてきた。そして、舗装されてこそいないが、道も発見できた。

特に根拠はないが、シユウが

「川上より川下のほうが街の規模も大きそう」

というと、サラも

「なるほど」

と妙に納得してうなずいていた。

そこで、二人は川沿いの道を東に下ることにした。

疲労はさほどでもないが、さすがに無飲無食のまじへくわすで半日近く歩いているので、二人はバテはじめてきた。

「ポーションでも飲んでみませんか？」

「飲む！」

予想以上にひどい味がした回復薬を飲むと、何ともひどい顔を見合わせ、なぜか二人してしばらく笑った。

そうして再び、舗装されていない荒れた道を連れ立って歩いていると、遠くにぼんやり、人工物らしき姿が見え始めた。

人の暮らしの気配を感じるというのは、どうしてこうも安心感があるのだろうか。

だが、旅というのは、ほっとした頃、というのが、なぜだか悪いことが起こりやすい気がする。

村のほど近く、ちよつと先に馬車が見えたところ、何かその馬車の周囲でただことならない気配を感じ、二人は駆け出した。

二人の男が、馬車の左右に別れて、黒い何かと戦っている。

御者らしき男は地面に倒れ、動かない。

二人が幌をかけられた商人用の馬車から離れようとしなないということは、中の様子はわからないが、おそらく誰かが乗っているのだらう。

「ゴブリン！」

一体一体の戦闘力はさほどでもないが、守る二人の男に対し、ゴブリンは40体ほどで攻めては引き、また攻める。

数で押す波状攻撃に、男たちは翻弄され、ひどく疲労しているように見える。

装備からすると傭兵か、冒険者か。

一人一人はさほどなまくらには見えないが、とにかく数が多い上、御者をやられて逃げるに逃げられないらしい。

シュウとサラは、それぞれの獲物を抜いて左右に別れて斬りかかった。

早足の靴の効果か、通常では考えられないほどあっという間に現場にたどり着く。

「フンっ！」

およそ普段とはかけ離れた裂帛の気合いを放ちながら、サラは両手大型剣のドラゴンスレイヤーを横薙ぎに一閃する。

鈍く黒い色に光るそれは、一振りですべて4・5匹のゴブリンを両断し、激しい血しぶきを周囲に散らしていく。

シュウも、素早い身のこなしから抜き身の日本刀を縦横に振り抜き、あっという間に7匹のゴブリンを斬り伏せている。

思わぬ援軍に一瞬あつげにとられた警護の男たちも、すぐに状況を悟ると、ゴブリンに伐って出ていった。

ほんの一瞬で攻守が逆転したのを悟ると、あつけないほど潔く、ゴブリンたちは逃走を始めた。

生まれて初めて体験する血と臓物のひどい悪臭の中、シュウとサラは、こみ上げる吐き気をこらえ真つ青な顔をしながらも、襲われていた男たちのほうへ戻った。

黒い出で立ちのシュウはまだしも、白銀のプレートアーマーに白い肌をしたサラは、返り血を浴びてすさまじい外見になっている。

その様子は、助けられた男たちでさえ言葉を失い、ややもすると

彼らさえ怯えさせているように見える。

「大丈夫ですか？」

シユウが声をかけると、呪いから解かれたかのように男たちは生気を取り戻した。

「あ、ああ。助かった、感謝する」

「サラさん、その人見てやってください」

道に伏せたまま動かない御者を差しシユウがいうと

「あ、うん……」

まだ右手に血まみれの剣を握ったまま呆然としたサラは、のろのろと倒れた男に顔を向けた。

これはダメだな。シユウはサラをみて直感した。

「すいませんが、その人お願いできますか？」

シユウは警護の男たちに声をかけると、荷馬車の中を覗き込んだ。中には、恰幅の良い商人風の男が一人、がたがたと震えながらうずくまっていた。

「すいません」

声をかけるとびくつと飛び起き、シユウを見て、また固まった。

「何か拭くものお借りできますか？」

シユウがいうと、やっと意味を理解したのか、柔らかそうなタオル大の布を何枚かくれた。

シユウはそれで顔をぬぐったが、なかなか血糊が拭えないので、やむを得ずサラの手を引きながら河原に降りていった。

川で手を洗い、顔を洗うと、やっと人心地つけたシユウは、そのまま布を水に浸すと、サラを石に腰掛けさせ、顔と手をぬぐってあげた。

「サラさん？大丈夫ですか？」

「え？うん」

サラはまだ心ここにあらずといった呆然自失の状態だった。

シユウは、サラの手から剣をはぎ取ると、濡れた布で血糊を拭き取り、乾いた布でから拭きして、サラの腰の鞆に収めた。

そして、サラの顔を胸に抱きしめて、そつと耳元でささやいた。

「サラさん、終わりましたよ。もう大丈夫です」

サラはなにも答えず、ただシュウの腰を力一杯抱きしめた。

「なあ、あの二人何者だろう？」

助けられた男たちのうち、右側にいた若干若い男が、左の大柄な年配者に小声で話しかけた。

「わからん」

大柄な男は、食い入るように見つめていながら、興味なさそうな声色で素っ気なく答えた。

「装備も腕も半端じゃない。だのにあれは、初陣のあとの新米みたいな……」

「わからん」

今度は明らかに不快感を漂わせながら、大柄な男は若者に振り返りいった。

「なににせよ、俺らに取っっちゃあ、命の恩人だ」

その様子は、街からも見えていたのだろう。

やがてしばらくすると、街の護衛らしき男たちが20人ほど、連れだつてこちらに駆けてきた。

彼らに紛れ、シュウとサラもゆっくり街のほうに歩みを進める。

ひどい手傷だが、御者の男もなんとか命を取り留めたようで、今は馬車に運ばれ、揺られながら街に向かっている。

「おまえさんたち、何者なんだ？」

街から駆けつけた男たちのリーダーらしき貫禄のある男が、シュウに尋ねた。

「あの腕前はすさまじい。なににせよ助かった、礼を言う」

シュウは曖昧に笑いながらその礼にうなずき返した。

「すいませんが、とにかく体を清めたいし、休みたいんです。今日は朝からなにも食べてませんし、一日歩き通しで疲れてるんです」
シュウは、並ぶと頭ひとつも高いサラの肩を抱きながら、リーダー風の男にいった。

「任せてくれ。宿と食事、風呂の手配は俺たちです。おれはガイラス。おまえらの名前を聞いていいか？」

「僕はシュウ。こっちは、サラです」

「格好からすると冒険者か？」

「訳あって旅してます。特に冒険者というわけでもないんですが」

「そうか。とにかく歓迎する。旅といったが、やはり王都を目指してるのか？」

「ええ、まあそうですね。急ぐ旅でもないのですが」

勝手がわからないので、シュウものらりくらりと歯切れが悪い。

「ならゆっくりしてってくれ。ようこそ、レリウの街へ」

レリウは、小振りながらしっかりとした外郭を持つ都市だった。

人口はさほど多くはなさそうなものの、暮らしぶりからそこそこの地力があるようにも見える。

シュウもサラも、この世界においては一財産というにふさわしい金銀を持っているので、金の面での不安は、多分さほどないだろう。反対に、それらを狙われる方がよほど恐ろしい。

まあとにかく、ここの、この世界の様子をしばらく学ばねばならない。

シュウは、まだ茫然と竦んだままのサラの肩を抱く手に力をこめ、ガイラスの招きに応じ、街の中心近くにある一軒の宿屋へと向かっていった。

ガイラスの顔なじみらしい宿の女将が、シュウとサラの血まみれの姿に一瞬肝を冷やしながらも、すぐに事情を悟ったか、風呂のお

湯を用意しに走り回った。

女将に、誰かサラの入浴の介添えを、と頼むと、何を心得たのか、「任せておきな。こう見えてもあたしは若い頃、エルナー様のお屋敷に奉公に上がってたんだ」と大きな胸を叩いて見せた。

サラの容姿と出で立ちから、女将は、サラがやんごとなきご身分だとも思ったのだろうか。まあ問題になる誤解でもないので放っておく。

金はいくらかとシユウが聞くと、

「まあ今日のところは奢おごられてくれ」

とガイラスが大きな口を開けて笑った。

人間、現金なもので、風呂に入り、身なりを整え、食事をすると胸にわだかまった嫌悪感より、疲労と眠気が勝っていく。

入浴中の様子を女将に聴き、また、先ほどの食事の様子を見ていたシユウは、サラがかなり参っている事をひしひしと感じた。

「サラさん、じゃあお休みなさい。なんかあつたら隣にいますから」シユウはそう声をかけると、自室に戻った。

サラの精神がダメージを受けるのはわかる。

正直、シユウにとっても先刻さうきのあれは正直、堪こたえた。

手に伝わる肉を切る感覚。噴き出す血。生暖かいそれが自分の顔に、服に、手にこびりつく。さらに、あの血と臓物の匂い。

魔獣ゴリンとはいえ、生き物の死にもぐるいの叫びと、断末魔のうめき。

寝るしかないな。シユウは布団の中で苦笑する。

ふと違和感を覚えて眼を開ける。

陽が落ちてからもどこかしら喧噪の絶えなかったレリウの街も、ようやく寝静まっているようだ。

自分の布団の右側に誰かがいるのに気がついて顔を向ける。

そこには、しどけない寝顔をしたサラがいた。

どうしたんだろう。怖くて一人で寝られなかったのだろうか？

ただ、シユウも今日はさすがに限界だった。

空腹と疲労、そして緊張。

それらから解放された肉体は、思考さえ許さないほどシユウの意識を睡眠へと引きずり落とす。

あれから街までずっとそうしていたように、せめて、サラの肩を

抱いてあげよう。

再びシュウは、深い眠りへと戻っていった。

「おや、夕べはお楽しみでしたかね」

「……それどころじゃありませんでしたよ」

にやりと笑う女将に起こされ、シュウはゆらゆらと起き上がる。

まだ布団では、サラが寝息を立てている。

「ガイラスとグレイズが下に来てるよ。あんたに話があるようだが、後にさせるかい？」

「グレイズ？」

「ああ、あんたが昨日助けた商人だよ」

「ああ……着替えるから待ってもらっていいですか？」

「あいよ」

女将は、水を張った洗い桶に新しいタオルを置いて出て行った。

シュウは、昨日洗濯を頼んでまだ帰ってこない羽織袴の変わりに別の羽織袴で身なりを整え、洗い桶で顔をすすぐと階下に降りていった。

「おはよう、シュウ」

ガイラスが、一階の食堂風になっている広間のテーブルに腰掛け、シュウに声をかけた。

「おはようございます、ガイラスさん」

「おはようございます、昨日は危ないところをお助けいただき、誠にありがとうございます」

例の恰幅のいい商人、女将がグレイズと呼んでいた男が、おずおずとシュウに声をかけた。

「いえ、たまたまですし、おかげで昨夜は私たちも助かりました」
半日以上無人の草原をふらつき、食^くつや食^くわずだった一日の終わり

にしては、非常に心地よい風呂と寝床だった。生き返った気がする。招かれるまま座り、シユウは、女将の心づくしの朝食を食べながら、二人の用件を聞くことにした。

「実は、シユウたちにグレイズと一緒に王都まで行ってもらいたいと思ってさ」

ガイラスはそう切り出した。

早い話が、昨日の立ち回りを見ての用心棒、ということらしいのだが、シユウは、サラの様子が気になってあまり気乗りがしなかった。

王都に行くのは心が惹かれるのだが、別に急ぐ旅でもないし、それよりゆっくりサラが心を落ち着かせてくれた方がよほどありがたい。

いち早くその表情を読み取ったグレイズが、困ったように目線でガイラスを促した。

「ここんところあまり魔物に出くわすこともなかったんだが、昨日のあの騒ぎでさ」

こいつがひどく不安がってるんだ。とガイラスはいう。

「それに、あんたらももし王都を目指すんだったら、一石二鳥じゃないかと思ってな」

まあ確かにそれはその通りなのだが。

「それはそうなんです、僕たちも誰かと約束があるわけではありませんし、サラの調子が戻るまで、ここで休んでいたい気もするんですよ」

すると、今まで黙り込んでいたグレイズが、こちらを窺いながら話し出した。

「で、でしたら、シユウさんだけでもいかがでしょう?」

グレイズがいうには、普段であれば、街の警備の若いのが数人で、充分まかなえる護衛なのだという。

だが、昨日、ここいらでは数十年ぶりになるゴブリンの集団での奇襲に遭い、グレイズも、護衛の面子も肝をつぶしているのだという。

だが、人口もそれなりにあり、人の往来も活発なレリウにとっては、物流の停滞は非常にづらい。

そこで、シュウやサラといった凄腕の冒険者が滞在している今、ガイラスにもう1台馬車を仕切ってもらい、2台で王都まで大量に必需品を買い出しに行きたい。

というのがグレイズとガイラスの考えらしい。

「出立の予定はいつですか？」

「明日、あるいは出来るだけ早い方がいいのです」

少し相談します。シュウは告げると、それっきり黙って食事をした。

さすがにおなかが空いたのか、サラは昼前にやっと起き出してきた。

どうやら確信犯だったらしく、シュウの布団に潜り込んだことは全くノータッチだった。

だったら、明日から同室でもいいかな、とシュウは思う。

とりあえず、1階のフロアのテーブルで、サラの食事が終わったあと、先ほどのガイラスたちの頼み事をサラに相談してみた。

「また、昨日みたいな事になるのかしら」

サラの口調は静かだったものの、明らかに気乗りがしないことは明白だった。

「じゃあ、僕一人で行ってみようか？どちらにせよ一度王都ってところの様子は見たいし。サラさんはその間、ここでゆっくり街とかを見ていてくれればどうかな」

「えっ……」

「片道10日くらいかかるかも知れないみたいだな話だったから、ま

あ20日くらいしたら帰ってこられると思うけど、いいかな？」
「……」

サラはうつむいてしまい、なにも話さなくなってしまった。

「とりあえず、気分転換に買い物に行きませんか？」

シユウが提案してみる。

「買い物？」

サラがあまり気乗りしないような口調で返すと、シユウは小声でサラに耳打ちした。

「下着、とか」

サラは真っ赤になりながらうなずいた。

小振りながらも、レリウの街は活気のある良い街だった。

縫製の技術はあまり良くないのか、服や肌着のたぐいはデザインも機能性も良くなかったが、二人ともそうした手持ちが全くなかったので、ここで10着以上のストックを買いそろえた。

そもそも、VRMMOの世界では、全くと言っていいほど下着の必要がないために、アイテムとして一切持っていないのだ。

シユウがサラにいったら即理解していたので女性用もそうなんだろうが、とにかく、パンツにゴムが使われていないために、使い勝手というか履き心地がひどく悪い。

裁断も、おそらく立体裁断になっていないのだろう。上着に干渉してごわごわした肌触りなのが残念だ、とシユウは思った。

だがまあ、ないよりはマシなのである。

その後、武器屋や防具屋を見て回った後、まだ少し早いですが、二人は宿に引き返した。

武器や防具は、めばしいものがなかった。そもそも二人は、この世界の常識からいったら非常に高性能な品々を大量にストックしているから、まああらためて買いたいと思えるほどの品がなかった

というのが本音であろう。

シュウたちは宿屋に戻り、女将に

「今日から相部屋にしたい」

と告げると、女将はすぐに了承した。

ベッドはツインがあったので、そうしてもらった。

料金のことを聞くと、ガイラスが払うと行って帰ったとのことで、価格のことを聞いても女将は答えようとしなかった。

あまり世話になるのは居心地が悪いので、シュウとしては本当は自腹で泊まりたかったのだが、やむを得ないだろう。

二人がそれぞれの部屋から移動をしているとき、女将がサラを呼び止めた。

「ねえあなた、凄腕なんだったねえ」

「……なんでしょうか？」

「一瞬でゴブリンを10匹くらいばっさばっさ斬っちまうんだって

ね

「……」

「うらやましいねえ」

サラは、カチンと来たのだろう。女将をにらむと、小声で吐き捨てるように言った。

「何がうらやましいんですか」

「うらやましいさ。あなたはその腕であの坊やを守れるんだからね
いままでの、サラをからかうような口調から一転し、女将はしみじみと言った。

「あんたちよつと下においで。お茶でも飲んで話そう」

「あれ、どこに行くんですか？」

「女同士の話だよ。あんたは部屋でも片付けておいで」

サラと女将は、一回のカウンター奥にある厨房のテーブルに腰掛けた。

サラにお茶を勧めると、自分も軽くお茶をすすって、女将は話し始めた。

「もう20年になるかね。あたしの旦那も、よく頼まれちゃ護衛の仕事をしてたのさ。」

「だけどある日、あんたらと同じように、ゴブリンの大群に出くわしちまってさ」

死体はひどい有様だったらしい。

街の人間たちが大挙して搜索に出たものの、馬と荷は奪われ、4人分の死体が散乱していた。

「うちのなんか、頭と足がなくなってたし、いくら探しても見つからなかったねえ。」

内臓もすっかりなくなつて、ぽっかり穴があいてるようだったよ。食われちまったか、どうしたもんか」

そこで女将は、サラをじっと見つめた。

「あんたは、そういう奴らと戦ってるんだ。あの日、あんたらがいなければ、あいつらは、奴らにそうされてただろうさ」

「……」

サラには、とっさに返す言葉が浮かばなかった。

「あたしにあなたの腕があったなら、亭主を一人で行かせたりしなかつたらうね」

「そういうと、女将は自分の茶碗を流し場ですすぎ、勝手口から表に出て行った。」

夕食の時間になると、再びガイラスとグレイズが宿屋を訪ねてきた。

シユウとサラを交え四人で夕食を摂りながら、明日以降の予定を話したいようだ。

「僕も王都へ行ってみたいですし、とりあえず一緒にしようと思います」

シユウはそういうと、サラを窺った。

「私も、行きます」

何があつたのか、サラはずいぶんあっさりと言った。

シユウは、不思議に思いながらも、心の底ではサラの変化を喜んでいた。

やはり、20日以上も離れるのは心配だし、なんといっても、淋しいのだ。

どんな理由はわからないが、こんな世界に突然放り出された二人だから、どこかしら共鳴している部分があるとシユウは感じている。だからこそ、出来る限り常に一緒に行動したい、とは思いつつ、でも、まだそうサラに頼むことが出来ない歯がゆさも、シユウは抱えていた。

ガイラスとグレイズはとても喜んで帰った。

明日からは、二人にとって、新しい冒険が待っている。

翌朝目覚めると、サラはまたシユウのベッドに潜り込んでいた。

洗い桶に水を張って持ってきた女将に

「夕べはお楽しみでしたかね？」

と聞かれて、シユウは

「はいはい……」

と答えた。

ガイラスとグレイズはすでに宿屋に来ていたので、サラとシユウでテーブルを囲み、朝食を済ませた。

別のテーブルには見覚えのある護衛が二人。そして初顔合わせになる護衛も二人。

つまり、ここにいる八人が、今回の道行きの顔ぶれということだろう。

食事が終わった後、早速二台の馬車に分乗し、王都への旅がスタートした。

王都へは、このまま川沿いの道を東に下り、5日ほど行ったところにあるライダンという都市から南東に進むようだ。

このコースの良いところは、なんとといっても片道10日間、野宿が一度もないということだ。

いうまでもないことだが、野宿せねばならない道のりというのは、それだけでさまざまなリスクを抱えることになる。

夜盗、野獣、魔獣に、もちろん自然現象さえ。

だから、一見遠回りに見えても、一度ライダンまで出るコースを必ず取る、とグレイズはいった。

それはおそらく、とても賢い判断なのだろう。シユウは思った。

第一、野宿はリスクだけではない。疲労も大きいのだ。

旅においては、疲労も重要な課題になる。

疲れているとまず、ミスが多くなり、集中を欠くようになり、理性より感情で物事を判断するようになり、そして体調を崩しやすくなる。

おそらく、商人としてはそのどれもが致命的な失敗につながり得るだろう。

見た目はちょっとだらしないが、このグレイズという男、これになかなか優れた商人かも知れない。と、シユウはちょっと彼を見直

していた。

ガイラスとグレイズという、この世界の二人の大人とよく話す機会を得られたのは、サラとシュウにとって非常に有益だった。

ガイラスは冒険者、グレイズは商人という立場で話してくれるというのもとても参考になった。

そして、サラもシュウも、この世界では相当な「強者」であるということもわかった。

「まず、あのレベルでゴブリンを蹂躪できるというのは、王家直属の騎士や、教会の聖騎士でもどれほどいるか」

ガイラスはいった。

「最初の一撃で何匹か狩り上げるといっなのはまあ脅力じょうりょくがあれば誰だつてやりうるけどな。あんたらは、たった二人で何十匹のゴブリンを駆逐したんだ」

「全滅させたんじゃないなくて向こうが逃げ出したんですけどね」

なんだか持ち上げられてるような感じになってシュウは苦笑した。

まあいずれにせよ、MMO的世界の中でいったら、プレイヤーキヤラ的な強い存在はあまり多くない、ということだろう。実際問題、あんなのがごろごろ居るRPG世界というのは、ちょっと異常なのかもわからない。

それにしても、あの光の玉にはじめにいわれてはいたが、本当にこの世界は、リアルだとシュウは思った。

NPCとかモブとか呼ばれる存在が、一人一人意志を持って動いている。

それは、シュウやサラにとっては、気の紛れにはなるが。

サラにとっては、ここ数日の旅程は、こんな世界に巻き込まれた自分に『納得』させるための良い機会になった。

あの宿屋の女将の言葉は、確かな衝撃となつて、サラを襲った。ただの近所の少年だったシユウと二人つきり、なぜこの世界に放り投げられたのかはわからない。

だが、もし シユウがいなかったら。

サラは、見た目は頼りないこの少年のことを考える。

2コも年下で、自分より背も低くて、18歳になるのにどこか幼さがあつて、なのに『かなり』自分よりしっかりしている。

宿屋の女将の言葉で自分が戦慄したのは、

「もし、シユウ一人行かせて、帰ってこなかったら？」
という事だった。

初戦の様子を見る限り、確かにシユウはかなりの使い手だろうと思つた。

だが、寝込みを襲われたり、だまし討ちを食らえば、どんなに優れた者でも、容易に命を落とすだろう。

自分が彼と共にいない状況で、もし彼が死んだら、自分はそれに耐えられるだろうか？

ここ数日、サラはシユウに甘え、夜中に彼のベッドに潜り込んでいる。

彼がそばにいないければ息苦しいほどに依存しているのだ。

それは精神的な依存であつて、おそらくまだ恋愛感情ではない。

本当にそうだろうか？

彼がこの世界の他の女に、もし恋をしたら。自分と行動を共にしなくなつたら？

自分はそれに耐えられるだろうか。

それにしてもシユウは、ベッドに潜り込んだ私にいくらでも手を出すチャンスがあるというのに、まったく手を出そうとしない。

それどころか、幼い娘をあやす父親であるかのように、ただ優しく肩を抱いてきたりする。

それがうれしい反面、腹立たしくもある。

この少年は自分に全く、魅力を感じていないのだろうか？

サラは、シユウの気持ちを測りかねて少しいらだつてもいる。

だが、この点ではサラも女性としてまだ成熟しきっていないのだらう。

シユウは、無意識であるにせよ、サラのこの行動　　自分の布団に潜り込んでくることの真意を理解しているのだ。

だから、双方がはつきりと恋愛感情を成立させない限り、シユウがサラを女として抱く日はこないだらう。

シユウは無意識に恐れているのだ。サラと一時の気まぐれで男女の仲になったとしても、その後、つまらないいざこざで、彼女との関係が壊れることを。

穏やかだった旅に暗雲が立ちこめたのは、4日目の午後だった。

昼食を摂るために馬車を止め、護衛たちが火をおこし炊事をはじめた時に、シユウが、前方右側の森の気配に気がついた。

「ガイラスさん、サラさん」

火のそばに座る二人にさりげなく近づき、シユウは、その変化を告げた。

「囲まれています」

グレイズの馬車には今、王都で売るためにレリウで仕入れた特産品が満載されている。

その一部は、途中の経由地で売却し、代わりに商品を詰め込んだりしているが、多くは、レリウの産業である乳製品や加工肉などの食料品や皮、布などだ。

つまり、魔獣にとっては、食欲をそそる香りを常に漂わせながら

獲物たちが歩いていることになる。

だが、彼らにとつて、何日か前に起きた衝撃を引き起こした『人間』がそこにいることが、ここまで彼らを襲えない理由だった。

そこで、彼らは再び数に頼ることにした。

さらに彼らは『知性』に勝る仲間を引き入れることにも成功した。オークという。魔法も使え、知恵も人間に引けをとらず、そして戦闘力では人間以上の存在を。

オークは、ゴブリンの獲物が、通常の倍にも当たる物資を積み込んで旅をしている事を見抜いていた。

おそらく、よほど警護に自信があるのだろう。

だが、数日様子を窺っていたが、一行ははずか8人。

こちらには、魔法が使えるオーク5人。それぞれが魔法のほか、弓や剣も使える。

この5人でも、あの8人を蹂躪しきれのではないかとオークは踏んだ。

さらに、1000匹を超えるゴブリンが集まっていた。

この先、ライダンを超えると、人間たちの軍隊が存在する。だが、ここで襲えば、決着が付く前にライダンから人間どもが駆けつけることは無理だろう。

オークは、襲撃を決意し、まずゴブリンに前後をふさぐことを指示した。

そして、ほかの4匹のオークに作戦を与えた。

「前後を囲まれてる。ゴブリンだな。えらい数だ」

ガイラスはいった。

護衛の男たちに火を始末させ、グレイズを馬車に避難させる。

「さて、どう戦おうか」

ガイラスは、シユウを見た。

「殲滅するしかありませんね」

シユウはため息混じりにいった。

「馬車ではたぶん突破は難しいでしょう。」

ならば、まず行く手をふさいでるゴブリンを殲滅して、そのあと馬車を進めながら後ろから来るゴブリンを防ぎながら、ライダンに向かうしかないでしょう。」

「そうだな」

「ライダンにはあてになる戦力はあるんですか？」

「こつちの異常に気がつけば、100人近い兵は出せるだろう。だが、来るまでにはかなり時間がかかる」

こちらの護衛のうち、二人には馬車の御者をしてもらわねばならない。

もう二人は、前後で先走りのゴブリンの始末をしてもらうとして、左右に残すのは、サラとガイラスになるだろう。

とすると。

「ガイラスさんとサラは左右で馬車を守ってください。前後には一人ずつ。馬車はいつでも走れるよう、御者を付けて待機してください」

「わかった」

「サラさん、だいじょうぶ？」

「もちろん。私も一緒にいなくていいの？」

「僕の殲滅が遅れたら、後ろから来るゴブリンが間に合わない。だからサラさんお願い」

「わかった」

「ガイラスさんは極力、馬車の周囲を離れないでください。前が片付いたら馬車に乗ってください」

「おう、たのむ」

「じゃあ、行きましようか」

シユウは、腰に刀を差したまま、ステータスを開いて、一降りの長刀を取り出した。

その光景を、ガイラスは茫然と見た。

「な、なんだそりゃ……」

シュウが取り出したのは、刃渡りが2メートルもある長刀。斬馬刀だ。

見た目こそ美しい日本刀のそれだが、刃渡りに加え、柄の部分も1メートル近くあるそれは、禍々しさまがまがさえ漂う銀光を放って、見るものに存在感を与える。

抜いた鞘だけをアイテムガジェットに戻し、シュウは数歩前方に進み、斬馬刀の峰を右肩に乗せて担いだ。

ガイラスはサラに、茫然とじつじつ尋ねた。

「おい、今あれどっから出したんだ？」

サラは、この世界にアイテムガジェットなどというものは存在しないことを知らない。その質問の意図がわからなかったため、答える代わりに、自分の持ち場に歩き出した。

「なんだか、本当にすげえな」

ガイラスは、理解することをあきらめ、自分の腰にある両手剣を鞘から引き抜いた。

シュウは、前方にゴブリンの大群 およそ50匹 が集

結するのを歩きながら待った。

そして、完全に街道を阻む形で包囲を完成したゴブリンに向かって、一気に駆けだした。

足に履く早足の靴が、人間離れた速度をシュウに与える。

ゴブリンたちが一瞬、虚を突かれた瞬間。肩に乗せていた斬馬刀を右下段に持ち替え、シュウは、立ち止まった。

止まった慣性を一気に刀に乗せ、シュウは斬馬刀を横薙ぎに振り切った。

間合いに入ろうとした周囲のゴブリンが10数体、その一閃で肉塊と化した。

左に振り切った斬馬刀を返し、シュウは左手の一群に向かって走

った。

粗末な武器を手にしたゴブリンたちは、一瞬で目の前の光景に恐慌した。

浮き足だった左翼のゴブリン20体ほどを、シュウは斬馬刀で刈り取る。

右翼のゴブリンはすでに潰走をはじめている。

ズシャ。

その瞬間、激しい殺気がシュウを襲った。

ほんの一瞬よけきれず、痛みが脳髄まで駆け上がった。

「ぐっ」

とつさに右手で脇腹をさわると、服が裂け、皮膚にも一閃の切り傷が付いていることに気がついた。

「魔法使いがいるぞ！」

シュウは50メートルほど後方の仲間にも叫んだ。

「オークだ！」

前の馬車の御者をしている護衛が悲鳴を上げた。

「くそつ。最悪だ」

魔法を使うオーク。それはもはや、商隊の護衛風情が立ち会える相手ではなかった。

王軍の騎士や魔術師が一軍を編成して戦うべき相手である。

ガイラスは、全滅を覚悟した。

「ガイラスさん、サラさん、馬車に乗って！」

シュウは斬馬刀をアイテムガジェットに放り込み馬車に駆け寄り、指示を出した。

前後を守っていた護衛も馬車に乗せ、御者の二人に馬車を出すよう命じた。

「サラさん、二台の馬車にレジスト出来る？」

「大丈夫！」

「じゃあお願い」

後ろの馬車の御者台にサラを乗せると、シユウは一人その場に残った。

背後から襲いかかろうと駆けだしたゴブリンの一群を殲滅するため、再びアイテムガジェットから斬馬刀を取り出す。

オークたちは、目の前で起こった戦闘を、啞然と見守っていた。だが、馬車が逃げはじめたことですぐに正気を取り戻した。

馬車を止めるなら、馬を殺すのが手っ取り早い。

前方に二手に分かれた4匹のオークたちは、自分たちに向かってくる馬車の馬めがけ、<ウインド・カッター>や<ファイア・ボール>の呪文を唱えた。

だが……。

サラはすでに、<レジスト>を完成させていた。

前方から飛んでくる<ファイア・ボール>と<ウインド・カッター>を見て、ガイラスは、あと数瞬で自分が死ぬことを理解した。

隣で御者をする護衛の男も同様に、あきらめに似たため息を漏らしていた。

しかし、目の前でそれらの攻撃魔法が、障壁に当たって碎けるのを二人の男は見た。

レジストされた自らの魔法を見て、4匹のオークは冷静さを失った。

自らの限界まで、彼らはさらなる攻撃魔法を紡ぎ出した。

馬車の周囲は、乱れ飛ぶ魔法とそれが碎ける残滓ざんじで、輝くほどきらめいた。

恐怖で、馬たちはすくみ上がっていた。

その中を、サラが淡々と歩いていった。

ついに、4匹のオークの魔力が尽きた。

巻き上がる粉塵ふんじんと魔力が晴れると、美しい金髪の女が、自分たちに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えてきた。

オークたちは、今起こったことなど忘れ、あの女を征服したいという純粹な欲求に捕らわれた。

あの女を組み伏せ、征服し、陵辱し、所有したい。

光り輝く白銀のプレートメイル。

手には、魔力で金色に光り輝くロング・ボウ。

彼らが心の底から忌み嫌いつつ、しかし自分らに隷属させたいと心から欲する、あのエルフ族に似た人間の女。

オークたちは、腰の刀を抜くと、サラを捕獲しようと駆けだした。ほんの一瞬前の力量差など、もはや彼らの思考からは欠落していた。

50匹のゴブリンと1匹のオークは、戦鬼のように立っている一人の少年に殺到した。

あれを倒せば後はどうにでもなる。

みたところ、あの小僧だけがこの商隊の戦力なのだと、指揮するオークは直感していた。

ゴブリンたちが奴を組み伏せたら、それらごと破砕してくれる。

オークは、魔法の準備をしつつ、その瞬間を待った。

50匹のゴブリンたちは、無秩序にただ一点。シユウに群がった。だが、ただ一匹としてシユウに触ることは叶わなかった。

シユウは、右足を軸に、斬馬刀を横薙ぎにして数回、回転した。

その瞬間、残ったオークは、<ファイア・ボール>と<ウインド・カッター>を、その光景の中心に向かって、全勢力で交互に打ち続

けた。

周囲に積み重なったゴブリンの残骸は、それらの魔法でなおも粉碎され、一帯は血潮と肉片で赤黒く染まっっていく。

流れるように自然な所作で、右手側の2体のオークの頭を、サラは射抜いていた。

サラの手にしたロング・ボウは、炎の祝福を持ったもので、射た矢が敵に当たると、ファイアボールと同等の魔法を発揮する。

サラに射抜かれたオークの頭は爆砕し、頭を失った体はそのまま崩れ落ちた。

左手の2体は、その隙に一気に駆け出し弓の間合いの内側に入り、両サイドからサラを捕らえにかかった。

サラは惜しげもなく弓を投げ捨て、腰の剣を引き抜き、迫るオークたちを呆気なく斬り伏せた。

シュツ。

剣を振り血糊を払い、足下の弓を拾い上げると、サラは馬車のほうに戻っていった。

魔法を打ち終わった瞬間、オークは、一瞬上空に黒い影を見た。

そして、それが、オークの知覚したこの世の最後の光景だった。

右手に刀を、左手に脇差を握ったシュウが、5メートル近い距離を一足で跳躍し、3メートルほど上から一気にオークを斬り伏せた。オークの放った火と風の魔法は、このふた振りの刃に施されたそれぞれの祝福によって、すべて切り捨てられていたのだ。

ゴブリンの肉塊を体に浴び、眼だけが白い赤黒い姿のシュウは、刀を払うと鞘に戻し、やっとアイテムガジェットからタオルを取り

出し、顔に付いた肉片と血糊を拭き取っていった。

逃げ出したほんのわずかなゴブリンを除き、90以上の魔物が、
たった二人の人間によって壊滅した。

ライダンには、王国兵の詰め所があった。

すっかりした城郭が街を囲む大型の都市で、門構えも鉄製のしっかりした跳ね橋になっていて、当然、堀も備えられている。

人口も、レリウの数倍はありそうな雰囲気だった。

そのライダンの王国兵の詰め所で、シュウとサラたち一行は、オークとゴブリン等との戦闘の詳細を訊かれていた。

一行八人が口をそろえ、シュウとサラ二人で、5匹のオークと100匹前後のゴブリンを倒したと報告したので、この街の駐留軍の隊長は、彼らを異常者だと思った。

常識で考えてあり得ない戦果だし、そもそも、そのような大群の目撃情報も入っていないなかった。

もしかしたらなんらかの幻術で、商隊から金でもせしめるたぐいの詐欺だろうか？

いずれにせよ隊長は、ほかの六人は早々に開放したものの、シュウとサラは未だに、詰め所に禁足していた。

小川で身を清めたものの、まだ入浴にありつけていないシュウは、昼飯を抜いていることもあって、夕飯時のこの時間までのらりくりとここに留められていることに腹が立ってきていた。

シュウが腹を立てているので、つられてサラも不機嫌になりつつある。

状況を確認しにいった斥候たち五人のうち一人が、青ざめた顔で帰ってきた。

「オークの死骸は五匹。ゴブリンはあまりに多くて確認が出来ません。」

あたりはすさまじい状態で、早急に片付ける必要があると思います」

斥候の言葉を聞いてもまだ信じられない隊長に向かって、シュウ

は立ち上がりいった。

「ではこれで。用があるなら宿までお越し下さい」

宿で入浴し、やっと人心地ついたシュウは、食堂で夕飯にありつくのと、先ほどまでの険はどこへやら、実ににこやかな表情になっていった。

その様子をサラは、微笑みながら見ていた。ガイラスは、やれやれ、と肩をすくめた。

サラの視線に気づいたシュウは、恥ずかしそうに笑い返しながら、おかわりした肉にかぶりついている。

「ずいぶんかかってたが、なに訊かれてたんだよ」

「いやなんにも。ただ足止めされてた感じかな」

ガイラスは心底不思議そうに、

「褒められこそしても、疑われるようなことはなにもないのにな」といった。

「まあ僕たちどっかに所属してるとか、そういう後ろ盾もないですからね」

そんなもんかね、とガイラスは相槌を打ったが、まあとにかく夕食はそんな感じでお開きになり、一同それぞれの部屋に下がった。

ところで、サラとシュウのベッドはついにダブルになった。

もうどうせツイン取ってもサラがこっちに入ってくるなら、最初から広い方がいいでしょ、というと、あっさりサラも同意したからだ。

だが、はじめは両サイドでもじもじ寝ているくせに、朝が来るとシュウの背中にぴったりくっついて寝ているので、結局シュウの左手側はぎりぎりベッドの端っこという狭い有様だった。

王都まで残り五日の旅程は、これまでと打って変わって楽なものだった。

道の手入れが行き届いているから馬車の揺れも少ないし、人通りも多く、魔物が出そうな藪や林などもない。

同じ方向に向かう商隊も多いので、警護の人数も自然と多くなる。もうここから先ではまず襲われることはないだろう。

結局のところ、昨日魔物たちに襲われたのも、あれが奴らにとって、最後のチャンスだったということなのだろう。

街道沿いには、昼食が摂れるような規模の集落もあつたりする。

ライダンと次の街のちょうど中間あたりに、商隊目当てだろう、かなり立派な食堂があつた。

「この辺で昼にしましょうか」

グレイズが声をかけると、一同、ほっと気をゆるめた。今日は美味しい昼飯にありつけそうだ。

うまい飯は人の心を豊かにする。

午後の旅路に出立したグレイズの商隊一行は、しばらくすると、軽装の騎乗兵に足止めされてしまった。

「レリウのグレイズ一行か？」

「はい、そうでございます」

「護衛のシユウとサラと申すものは？」

「僕たちですが……」

「おまえらに警備隊長が話があると仰せだ。急ぎライダンまで戻るように」

それを聞いたシユウの顔がみるみる赤く染まっていく。

「僕たちには用はありません。話があるなら次の街まで来るように、隊長とやらにお伝え下さい」

「貴様、逆らうか？」

「逆らう？」

ギリリ、とした鬨気がシユウの全身からあふれた。

まるでその見えない鬨気に当てられたかのように、騎乗兵の馬が怯えて数歩下がった。

「何を言っているのか僕にはさっぱりわかりませんね。」

こちらは商隊の警護で王都に向かっているわけです。呼び戻されれば商売にはなりませんね。

それに、なんの用件で呼ばれているのかもわからず、いちいち引き返すことも出来ません。お聞きしますが、何用ですか？」

「し……知るか！ とにかく隊長が呼びだ。おとなしく従った方が身のためだぞ」

「そんな馬鹿げた命など聞けませんね。とにかく、あなたは戻ってお伝え下さい。用があるならそちらから来いと」

「き……貴様っ」

騎乗兵は、思わず腰の剣に手を伸ばした。

「いいか、抜くなよ」

シユウは、腰の刀の鯉口を切つて構えた。

「抜けばこちらも護身のために抜く。おまえのような下つ端が、国の威信を笠に着て何人かかってこようと、負ける気はしない。おまえより、昨日斬ったオークのほうか、よほど齒こたえがあつたと思つぞ」

シユウは、位押しで威圧する。緊迫した雰囲気の中、騎乗兵の気が萎えたのを察し、シユウは構えを解いて、鯉口に八バキを収める。キン、という澄んだ金属音が、周囲の固まったような空気を一気にゆるませる。

「いいだろう、せいぜいレイラズで首を洗って待つておれ」

言い捨てると、騎乗兵は馬を返して走り去った。

「おいおい、いいのか？」

ガイラスは、今になって吹き出した冷や汗をぬぐいながらシュウに話しかけた。

「構いません。それより、なんか雲行きがおかしくなってきました。グレイズさん」

不安そうに馬車から顔を出したグレイズにシュウは話しかけた。

「はい」

「この先、僕たちが一緒にいることでもしかしたら、要らない面倒ごとに巻き込んでしまいかねないですね。

もうあまり危険がなさそうですし、僕たちはここまでということにしませんか？」

「いいえ、とんでもない。わずか数日で二度も命を救われた身です。どうかお気になさらず」

意外にもグレイズは、シュウのその申し出をそういつて断った。

「いえ、やはりレイラスから別行動にしましょう。

あなた方は、もめ事を恐れ私たちを解雇したといえ、申し開きも立つでしょう」

シュウは一瞬考え、そう皆に伝えた。

「僕たちは、レイラスである連中を待ちます。もし良かったら、良い宿を教えてください」

「まあ、じゃあレイラスまでは一緒に行こう」

ガイラスがそういったことで、再び一同は動き出した。

周囲の商隊も、どうしていいかわからず立ちすくんでいたが、釣られるように動き出した。

レイラスでは、あえて一行とは別の宿を取った。

なんらかのトラブルにまで発展した場合、同じ宿では飛び火する可能性があるためだ。

宿の前で別れるとき、シュウとサラに、グレイズはそれぞれ金貨

一枚を謝礼として差し出した。

要らないというシユウに、

「商人は貸しは作っても、借りは作りたくないものなのですよ」と、笑いながら強引に、二人の手に金貨を握らせた。

「とはいえ、今回のことでは、大きな借りを作ってしまいました」

「いいえ、僕が面倒だっただけです。グレイズさんたちをわがままに巻き込んでしまい、申し訳ありません」

「じゃあ俺たちは行くぜ。シユウ、サラ。」

もし、なんかあつたら、俺んどこに来てくれ。まあ闘いじゃ全力に慣れそうもないが、なんでも相談に乗るぜ」

ガイラスも笑いながらいった。

今まで大人数だった夕食も、二人きりになるととたんに淋しくなる。

「サラさん、ごめんなさいね」

シユウは、ぼそつと、サラに詫びた。

「ううん、久しぶりに二人つきりになれたし、いいのよ」

サラは、気に病むシユウに笑っていった。

「わたしもなんか腹立ってたし、ね」

馬の足音が外から聞こえる。やっときたようだ。

「さあ、どんな騒ぎになるんでしょうね」

二人は食事をやめると、傍らにあらかじめ用意してあった得物を腰に佩いて、宿の正面から外に出た。

「シユウ殿とサラ殿とお見受けいたします。私は、ノイスバイン騎士団のアルノルと申します」

甲冑を着た偉丈夫が、店の正面に並んで立つ二人に、形の良い礼をして声をかけた。

「シユウです。こちらはサラ」

シユウも答えた。

「早速ですが、お二方には、こちらの手違いから、大変ご不快な思いをさせたようで、ライダンの者らに成り代わり、私からお詫びを申し上げます」

アルノルは、二人を前に頭を下げていった。
意外な成り行きにちよつととまどいつつも、シュウは気を許すでもなく、固い口調で応えた。

「謝罪を受け入れましょう。アルノルさん」

「事情は、グレイズ殿からもお聞きいたしました。お仕事の上でも大変なご迷惑をおかけしてしまいました。そちらについてもお詫びいたします」

「わかりました。ところで、何かご用のようですが、私たちは食事の途中です。もしよろしければ、食事を続けてもよろしいでしょうか？」

再び宿に戻り店主に説明すると、主は了承してくれて、食事の続きをさせてもらえた。

同じ席を求めたアルノルを迎え、一同は、会話をはじめた。

壁際に、アルノルの配下らしき若者と少女の騎士が、気をつけの構えで立っているのが気に触るが、気配からして今のところ害意はなさそうなので放っておく。

先ほど食いつばぐれた肉料理が出てきて、シュウはとたんに相好を崩す。

どこかしら緊張をしていたサラとアルノルも、それを見てふつと気がゆるんだ。

こんな表情をするときのシュウは、ひどく幼く見える。

もともと年齢より幼く見えるシュウだが、こうしてみると、まるで12・3歳の少年のようにも見えるほどだ。

「お二方にご迷惑でなければ、召し上がりながらお聞きいただきたいのですが」

アルノルは、沈黙していた方が気まずかろうと、切り出してみた。

「お願いします」

シユウは、まだ幸せそうな顔で肉をほおばりながら応えた。

「まず、我々がこちらに来ましたのは、お二方をお招きしたいと、国王から命ぜられたためになります」

アルノルが二人にいうには、早馬で状況を報告された軍務卿が、とりあえず状況を宰相に伝え、それを王が聞き、いたく興味を示したのだということだった。

早速、そのものたちに会いたい、手配せよという話になったのだが、ライダンの者たちの不遜な態度によってこじれたことを知ったアルノルの部下が王都まで走り、そこで彼らがここまで来たのだという。

「なるほど、わかりました」

「お二方は馬には乗れますかな？ もし扱えるようであれば、明日、ご同行いただきたいのですが」

「サラさん、乗れます？」

「私は乗れます。シユウ君は？」

「いやちよつとわからないけど、もしかしたら大丈夫かも」

わからないというのも変な話だ、とアルノルは思ったが、まあとにかく、明日この二人のために馬を用意しよう、と考えた。

「お食事中失礼いたしました。それでは、明朝お迎えに伺います」
アルノルは、二人にあらためて礼をして、店を立ち去った。

「いやはや驚いた、お二人さん、何者ですか？」

騎士たちが立ち去ると、主が、これはサービスだ、とグラスに酒を入れてやってきた。

「いやただの商隊の護衛ですよ」

「いやいや、ただの護衛に騎士団長が挨拶にお見えにはならんですよ」

「えっ、あの方そんなに偉かったんですか？」

サラが口を挟むと、主は、得たりとばかりに勢い込んだ。

「そうですね、あの方は騎士団を統括する団長様です。騎士隊の隊長たちのさらに上。この国の護りの要のおかたです」

そうか、それは少しご無礼しちゃったかな、とシュウは思った。

しかし、昼間の不快感がまだ少しシュウの先入観として、まだ、この国のイメージを悪くしていた。

翌朝、3人の騎士たちが早朝から迎えに出てきた。

さすがに、乗れるかわからない馬に乗って、通常四日かかる王都への道のりに出るということで、シュウは、朝食はごく軽めに見た。

サラは普通に食べていた。たぶん自信があるのだろう。

昨晚、シュウが、馬に乗れるかわからない、といったのは、こういうことだ。

ゲーム内では、馬に乗ったことが何度もある。

だが、リアルでは、乗るところか触ったことさえない。目の前で見たことも、たぶん一度あるかというほどだ。

だから正直、わからない、ということだったのだ。

だが、意外なことに、鞍にまたがる姿からして、傍目にはシュウの身のこなしは見事なものだった。

「お、これは。大丈夫そうですね、サラさん」

「ええ……見事なものですよシュウ君」

サラはおかしそうに笑ったが、そういうサラも見事な乗馬だった。「ではお二方、参りましょう」

アルノルを先頭に、サラ、シュウ、そしてお付きの2名という順に、街道を南下し、一路、王都バインスタインを目指して走る事になった。

当初は、二人に気を使っていた騎士団長も、どうやら二人の馬の扱いのめどをつけたようで、けっこう本気で馬を飛ばし始めた。

馬車で残り3・4日ある距離をこの速度で行けば、馬が完全につぶれやしないか、と、シユウは余計な心配をしつつ必死で馬を御している。

見た感じ、サラが気持ちよさそうに走ってるのがシユウには憎らしい。

ひとつめの街には入らず、外周を大回りした。

街を通り抜けるよりおそらく、そのほうが速いのだろう。

ふたつめの街に入るとやっと、アルノルは馬の速度を落とし、通行人に配慮しながら街の中央まですすんだ。そこには駅があった。

どうやらここで馬を乗り換えるらしい。

なるほど、あれだけ飛ばせた理由がわかった。

汗で真っ白になった馬を乗り捨てると、騎士団の面々は、おそらく自分の馬であろう、そこらとは比べものにならないほど立派な馬に乗り換えた。

シユウとサラにも、駅が新たに貸し出された。

王都に到着すると、一行は歩みをゆるめた。

今までとは比べものにならないほど巨大な城郭と都市。

正門からはいると、まっすぐ一直線に王城に向かって伸びている目抜き通りの広さと立派さに、シユウは息を呑んだ。

この辺は日本の城との違いだな。

シユウは感じた。

日本の城は、城下町を形成すること自体はこのような西洋風の城塞自体と変わらないが、攻め手が本丸にまっすぐ掛かれるような作

りにはまずしない。

見晴らしの良い道など作らないし、本丸に至るまで幾重も曲輪を用意して、適宜殲滅を謀れるような普請になっている。

物見高く周囲を見物しているうち、一行は王城の門に到着した。

王城の中に騎乗のまま招かれる。右手に馬屋があり、そこで一行は馬を下りた。

厩務を担当しているのだろう若者たちが、さっと駆け寄り、それぞれの馬を曳いていく。

「お二方、大変ご無理をさせてしまい、恐縮です。これから控えの間にご案内いたしますので、どうかしばしおくつろぎ下さい」

騎士団長のアルノルはそう二人に告げると、若い二人を引き連れ、来た道を引き返していった。

代わって、いかにも侍らしき壮年の男性がこちらに歩み寄ってきた。

「遠路のご来訪に感謝いたします。侍従長のクルトと申します。まずは旅の埃などを落とされますようお願いいたします」

慇懃な挨拶いんぎんあいさつをされた。

正直、風呂はありがたい。汗と砂埃ですごいことになっているからだ。

入浴後二人は、まあ謁見ということで、最も正装に近い服を選んでみた。

とはいえ、シユウは黒衣の侍そのものだったが、サラは炎属性の赤いプレートメールの、兜以外のフルセットだった。

どうせ謁見前には取り上げられるだろうと、二人とも武器を持たずにいた。

しばらくすると、いったん席を外していた侍従長が再び戻ってき

て、謁見の準備が整ったと告げた。

これが謁見の間というものだろう。

莊嚴な扉が両側から衛士によって開かれると、中は吹き抜けの天井。

幅広の赤絨毯が国王の王座の前まで一直線に敷かれ、その両側にまず衛兵が、そして、王の近くには貴族らしき面々が起立していた。王は、二人が入った瞬間に王座から立ち上がり、歓迎の意を示した。

二人は、侍従長に押され、王の前まで歩みを進めた。

侍従長はそこでshukō跪きうつむいたが、別にシユウもサラも、この王国の民でもなければ貴族でもない。

日本式の立礼、つまり、お辞儀をもって王に敬意を表した。

かたわらから、その無礼をとがめるように、あからさまな舌打ちをされた。

「サラ様、シユウ様をお招きいたしました」

侍従長が王に報告する。

「よく来てくれた。聞けば我が臣下がなやら無礼を働いた様子。お詫びいたす」

「シユウと申します。こちらはサラ。お招きいただき光栄です」
シユウもしれつと返す。

「ライダーでの働き、礼を言う。臣民の憂いを除いてくれた功を勞い、両名に褒賞を与える」

「ありがたき幸せに存じます」

横合いから、いっそ王より尊大そうな声で

「下がってよろしい」

と声がかけられたので、二人ともほっとし、

「失礼いたします」

と、とつと退室させてもらった。

あれがたぶん、舌打ちの主だろう。

一緒に下がった侍従長に、しばらくここで待つようにいわれ、二人は控え室に腰掛けていた。

侍従長が退室してからしばらく経つが、なかなか戻る気配がない。早朝から馬を飛ばして午後までかかったために昼食を抜いていることもあって、シュウはほんの少し不機嫌なのだ。

早く開放してもらいたい。

「サラ殿、シュウ殿、お待たせして済まない」

ノックも無しに反対側から飛び込んできた男には見覚えがあった。王様だった。

「あらためて、よく来てくれた。予はノイスバイン王エカルド。よしなに頼む」

さすがにシュウもこれには肝をつぶした。

「形式張った招きをしてすまんのだ。一応、ものには順序があるゆえな」

エカルド王はにやりとわらって、立ち上がった二人に椅子を勧めた。王の椅子を、後ろから付いてきたのであるう、例の侍従長が流れるようにさっと引く。

実により呼吸で様になっている。

二人の椅子は、王の後ろから入ってきた三人の騎士のうち、アルノルの左右にいたあの若い騎士たちが引いてくれた。

二人も着席させてもらった。

「ライダンからの経緯はアルノルから聞いた。予からもあらためて詫びよう」

「いえ、すでにアルノル団長より丁寧なお詫びをいただきましたし、

先ほども、真つ先にお言葉をいただきました。どうか

打てば響くタイミングで、シユウが応える。

「そういつていただけるとありがたい。だが、あの謁見でも、馬鹿者がそなたらに無礼な振る舞いをおつた。これも詫びよう」

「とんでもありません。私たちの礼が、こちらの礼にそぐわなかったのでしょうか。その気はありませんが、ご無礼がありましたらお詫びいたします」

「かまわん、そなたら、名前から察するに遠い異国の方であろう。処が違えば、作法も違つのが当然だ」

これでお互いのわだかまりは、ひとまずなくなった。

「そなたらはなぜ我が国に来たのだ？ 話を聞くに、仕官や商いではあるまい」

一息入れて、王が話を継いだ。

「はい。私たちは、いろんな国を旅して歩こうとここまで参りました。たまたま、レリウで魔物に襲われている商人と出会いました、王都までの護衛を頼まりました」

「なるほど。そこで例のオークどもと出会った訳なのだな」

「そうです。あとはご存じの成り行きです」

「今後はどうするつもりなのだ？」

「数日王都で買い物などさせてもらい、その後、旅の行き先を決めようと思つています」

「そうか、ではこうしよう。そなたらに、予から旅の手形を呈しよう。それと、そのような事情では物など送つたところで邪魔になろう。金で褒賞を贈るとしよう」

旅の手形、ということとは、国境を越えるときにはなんらかの関所があるということなのだろう。これは二人にとって、最もありがたい贈り物だった。

「それは…それは本当にありがたく存じます」

シユウは、心から感謝した。

「最後にひとつ、予から頼みがある」

「なんででしょうか？」

「ここにおるアルノルと、一度手合わせを願えんだろうか？」
なるほど。二人の実力を見たいということなのだろう。

断つても良いのだが、あまりに王が嬉しそうにいうので、つい乗っ
てしまった。

「どちらとの手合わせをお望みでしょうか？」

王がアルノルを振り返ったのに釣られて、控え室にいるすべての者
の視線がアルノルに集まった。

「……サラ殿との手合わせを所望いたします」

アルノルはいった。

しまったな、躊躇しないで自分が承けると言えば良かった。

シユウは後悔したが、意外にも、サラは嬉しそうに即応した。

「謹んで、お受けいたします」

準備はわずか10分ほどで整えられた。

王は城の閲兵用のベランダから様子を見ることにしたようだ。

サラは、美しい葦毛の馬を借り、アルノルは、栗毛の馬を曳いて
きた。

サラは、例の炎属性のプレートアーマーのままだったが、今回は、
きちんと兜をかぶり、髪の毛を束ねて保護している。

二人は、どうやらジョストを行うつもりのようなだった。

ジョストというのは、典型的な騎士の競技である。

左右に別れた騎士たちが、一直線にすれ違いながら、一騎打ちで
勝敗を決する競技で、華麗で、豪快で、危険な闘いである。

非常に壊れやすい模造の木製武器によって争われる。

勝負は二本。

一回戦は馬上槍。次にバトルアックスで争われ、最後に、剣で勝敗を決める。

「かまえ」

充分に間合いを取った双方の中間に、騎士団員らしい男が立ち、勝負を預かっている。

「はじめ」

かけ声と共に、両サイドの騎士たちが一気に馬をトップスピードまでしごき上げる。

王の閲兵バルコニーから見て、右が深紅のアーマー、サラで、左が純銀のアーマー、アルノルだ。

どちらも、なんのためらいもなく馬を進めていく。

見ているこちらのほうが肝が冷える。 。

シュウは不安で、顔をこわばらせている。 トップスピードに達した双方は、あっという間にその瞬間を迎える。

ガキン！

激しい衝突音は、鎧の音だろう。

二本の馬上槍は、お互いなんの策も弄さぬまま交差し、双方が直撃となる一打を交差させた。完全なカウンターになっていたようにシュウには見えた。

1秒の間にも満たない刹那、バランスを崩し、アルノルが落馬する。

「なんと……」

王が驚きの声を上げるのを聴きながら、シュウは、ほっと胸をなで下ろした。

アルノルの許に駆け寄った団員が、ケガのないことを確認し、再度アルノルを馬に騎乗させる。

再び左右に別れた二人は、今度は得物をバトルアックスに持ち替え、合図を待つ。

バトルアックスも木製の模造品ではあるが、馬上槍よりは頑丈に作られているため、うかつに当たれば大げがや、最悪、命に関わるほどの危険がある。

「はじめ！」

審判が叫ぶ。

アルノルは、バトルアックスを頭上で器用に回転させ威圧する。単純で、効果的なパフォーマンスだ。

対するサラは、右手一本でバトルアックスを自然に持ち、淡々と馬を加速していく。

二人が交差するほんの一瞬前にアルノルはバトルアックスを長めに持ち替え、先手とばかりにアックスを横薙ぎにふるった。

大味なパフォーマンスの後だけに、その攻撃の鋭さは、見る者の息を止めるほどだった。

だが、サラはその軌跡を自分のバトルアックスで完全に防ぎ、そのまま押し返し、ついにアルノルの頭部に斧の刃先を当てていた。

圧倒的な力量差だ。技でもなんでもない。強引な、力の蹂躪。

落馬こそしなかったものの、完全にのけぞってバランスを崩したアルノルは不覚にも得物を落とし、2回戦も敗退。

最後の勝負は、剣による馬上試合。

これも木製の両手剣で争われる。

「はじめ！」

審判が叫ぶと、最後もお互い、馬を全速で走らせ、一気に剣をぶつけ合った。

だが今度は、サラは走り抜けず、馬の速度を緩めると、後ろから一気に襲おうと企てた。

だが、アルノルも見事な手綱捌きで馬を返し、サラが届く一足前に体制を整えていた。

そのまま失速した二人は、見ほれるほどの剣捌きで、お互いの剣と競り合っていた。

だが、やはり一合一合の重みはサラに分があった。徐々にアルノルの乗っている馬が押されていく。

サラは、動きが大きくなったアルノルの剣を紙一重でいなす。アルノルがほんの一瞬バランスを崩した隙を、サラは見逃さなかった。

激しい打着でアルノルの右手を打ち据えると、アルノルが剣を落とす、ここで勝敗は決した。

07 (後書き)

2011/11/26 シェイカーさんのご指摘で、記載ミスを修正いたしました。アドバイス、ご指摘、ありがとうございます。

「兩名、見事である」

試合後、再び王城に戻り、控え室に出頭したサラとアルノルは、王からねぎらいの言葉を受けた。

その後、中に金貨が詰まった革袋を、サラとシユウは受け取った。どちらにも、金貨が100枚ずつ入っているらしい。

その量がどのくらいの価値なのかは、まだこの世界での経済が全くわからない二人にはわからなかったが、おそらく、かなり過分な褒賞だろう、とは思った。

借りは作りたくない、といって護衛して命を救った商人のグレイズが二人に渡したのが、金貨一枚ずつだったのだ。

ちなみに、後に二人が知るところによると、金貨5枚もあると、この世界では一家が一年、不自由な生活が送れる程の価値のようだ。

「それでは予はこれにて。シユウ殿、サラ殿、本日はよく参ってくれた」

後のことはアルノルがよきに計らえ。

そついい残し、王は去った。

シユウがアルノルに、城下でおすすめの宿の手配を依頼した。

アルノルは、例の若い騎士たちに何事かを命じていたので、今日の宿は安泰だろう。

「夕食まではまだ間があります。お二人は何かご希望はありますか？」

「どうやらアルノルは自ら案内役を買ってくれるつもりようだ。

「でしたら、世界地図とか、この近隣の国の情勢がわかるような書物を購入したいです」

「私は、服などの購入が」
シユウとサラは、それぞれの希望をいった。
「心得ました。それでは、シユウ殿は私をご案内いたしましょう。
サラ殿には、城の侍従をおつけいたします。女性同士のほうがよろ
しいでしょう」

街に出ると、さすが王都。これまでに通ったどの街にもない壮観
な建築物が随所に広がっていた。

人口も、大きめだったライダンでさえ比べものにならない規模の
ようだ。

道行く人間たちの数でさえ、王都では、人いきれというにふさわ
しいほどの混雑を見せている。

スリが多いそうさ。すられてもこの混雑では、確かに捕まえるの
は容易ではないだろう。

サラを案内しているのは、いわゆるメイドさんのような女性だっ
た。

王室御用達の高級仕立て店に連れて行かれているようだった。

シユウは、目抜き通りらしき一角にある、書店に案内されていた。
書店で書物を見たとき、シユウは、ずっと気になっていた懸念が
解消され、ほっとしていた。

どうやらこの世界に連れ込まれたときに何かしてくれたようで、
文字の読み書きが出来そうさ、ということがはつきりわかったのだ。
シユウは、店内にある百科事典、地図、薬草事典、歴史事典、魔
法事典などを手当たり次第に購入した。

そしてそれらをアイテムガジェットに手当たり次第放り込んだ。
アルノルと書店主はあっけにとられてその光景を見ていた。

「シユウ殿、それは一体、なんなのですか？」

アルノルは、やっと言葉を紡ぎ出した。

「あー、えっと」

シユウは、どのように説明しようか頭を悩ませた結果、魔法ということにしようと思った。

「まあ、一種の魔法の道具です。持ち物を、ある道具を使って魔法の空間に閉じこめます。開いたときに取り出せるようになってます」店主とアルノルの目の前で、実際に世界地図を取り出してみせる。そして、また仕舞ってみせる。

二人は、理屈はわからないものの、仕組みは理解したようで、いたく感動していた。

書店主は、やたらとほしがり入手法を聞こうとかなり頑張っていたが、実際は、シユウたちにとってはゲームに付いていたただのアイテム機能にしか過ぎないので、全くわからなかった。

「いや、まあ秘匿を条件に譲られたものですので、私たちにもよく解らないんですよ」

そういうことにしておいた。

金貨5枚ほどの書籍をシユウは買いあさった。

次はどこに行きたいか、とアルノルが尋ねるので、シユウは、そういうえば、と思い立って、

「鍛冶道具の店に行きたい」

とアルノルに頼んだ。

「ここが工具屋です」

アルノルが案内したのは、本当にいかにも工具の店、というべき、乱雑な道具屋だった。

工具の店というのは、シユウにとってはどんな店でも本当に心が躍る。

なぜなのかわからないが、シユウは子供の頃から、文具屋や工具

屋、ホームセンターのたぐいが大好きで、何時間商品を見ていても飽きなかった。

だが、鍛冶屋道具を扱う店に来たのにはちょっとした訳があった。ゲーム中に身につけたスキルが、今のところ全部使えている。

ならば、冒険ギルド引退後にやっていた『鍛冶屋』が出来るのではないだろうか？

と思いついたのである。

この世界の武器は、やはり使うと劣化する。刃こぼれもすれば、折れたり曲がったり。

そうしたものを鍛え直したり、研ぎ直せば、まあちょっと便利かな、と思っただのだ。

結局、砥石や工具類一式。紐やら針金やら革などの原材料。針や糸などを大量に買い、またアイテムガジェットに放り込んでおいた。「それはどれくらい収納できるのですか？」

アルノルはその光景を見て、またうらやましそうに尋ねてきた。

「さあ、試してないんでわからないです」
シユウは答えた。

アルノルの見たところ、ここや本屋で買ったものは、もう優に二部屋以上の大荷物になっているはずだった。

それらを魔具に収めてるとはいえ、もし重量があるなら、生半かな重さではないだろう。

だが、本当にわからないシユウは、聞かれても答えようがないのである。

「後は、日用品や旅の道具が欲しいんですが、それはサラさんたちと合流してからでいいですね。アルノルさん、馬車って買えますかね？」

「もちろん。私でよければ、よい馬を見繕いましょう。馬車は、中古であればすぐに手にはいるでしょう。どのような馬車をお望みで

すか？」

「商人ではないので、荷馬車は必要ありません。どれだけ値が張ってもよいので、寝泊まりに耐える馬車と、それを引ける馬が欲しいです」

「となると、旅芸人が使っているような馬車がよいのでしょうかね。わかりました」

馬と馬車はこちらで探しておきます。とアルノルがいうので、シユウは好意に甘えることにした。

荷物は実際はアイテムガジェットに収納してしまえばいいので、馬車は寝泊まりが出来て、雨露をしのげたらよいのだ。

あまり野宿はしたくないが、万が一、ということはあり得るのだから。

サラは、かなり服を買い込んだらしい。

既製服を数着、季節に応じてなん揃えも買い、更に、さまざまなドレス類を、オーダーメイドで注文したらしい。

ついでにシユウの分も、ということ合流後、シユウも採寸をされた。

服自体はもうサラとメイドさんが必要なデザインを伝えてあるらしく、採寸のみで開放されたのはありがたかった。

ホームセンターや文房具好きのシユウは、ファッションショップピングは苦手なのである。

その後、サラがどうしても見たいという「魔法」の店に行った。

魔法は、固有スキルで自然に覚えるものと、呪文を購入して覚えられるものがあった。

だから、もしかしたら魔術書を買って学べば、呪文が増やせるかも知れない、とサラは考えていた。

先の戦闘で、シユウが<ウインド・カッター>によって傷つけられていたのを、サラは重く受け止めていた。

シユウは魔法が使えない。であれば、魔法が使える自分が、シユウの分も魔法を自在に扱う必要がある。

聖騎士として、直接攻撃と僧侶系の回復魔法、防御魔法が得意だったサラだが、可能であれば攻撃魔法も覚えようかと考えていたのである。

魔術書は、ゲームのそれとは違い、使い捨ての消費アイテムではないようだった。

だとしたら、二人分でも各一冊ずつで事足りるだろう。

ということで、サラは、店主に、店内にあるすべての魔法を一冊ずつ欲しいと告げた。

サラとシユウ以外の一同は驚いた。そんなことをすれば、むろん金額はすさまじいことになるが、量も半端なものではあるまい。

だが、アイテムガジェットがあるからまあ大丈夫だろう、とサラもシユウも思っていた。

魔術書はおおむね高額だ。その理由は、もちろん希少性や利幅の面もあるのだが、根本は、すべてが手書きによる模写だということだろう。

文字の模写は、まだ根気があればなし得るが、図の模写は、才能と、時間と、労力を要求される。

結局、魔術書は350冊、金貨1800枚にも及ぶ買い物になったが、サラはアイテムガジェットから1800枚の金貨を取り出し、350冊の魔術書を淡々とアイテムガジェットに放り込むと、ついに全部収納しきってしまった。

ここでも魔法屋の店主にずいぶん質問攻めにあつたが、シユウが前と同じ説明をして煙に巻いておいた。

服の仕立ては全部で10日ほどかかるらしい。

その間にシュウとサラは手分けして、野宿の際に必要な調理器具や調味料、保存食料や、中古で買った馬車の修繕、馬車の内装や寝具の購入といった準備を粛々とこなしていった。

調理器具や家財道具はすべてアイテムガジェットに放り込んだので、見た目ほど馬への負担は厳しくなさそうだったが、そうはいつでも、馬車自体がけっこうな重量になる。

そこで、アルノルは、頑丈そうな重種馬を二頭選び出していた。騎士が乗っている馬は、シュウたちが知っているサラブレッドに近い馬のようだった。

軽種馬と呼ばれる馬は、500kgぐらいの体重が平均的だが、重種馬は、体重1トンを超えるような大型馬になる。力は強いが足はさほど速くない。

すべての準備は3日ほどで整ってしまったので、結局服の仕立て上がり待ちとなってしまうた。

その間二人は、馬の馴らしを行ったり、本や魔術書を読んだりして過ごした。

馬は、アルノルの紹介で雇った馬丁が驚くほど二人によく懐いた。特に、シュウへの懐き方は、馬丁がその才に嫉妬を感じるほどだった。

ガイラスとグレイズの商隊が王都に到着した。

二人は、王都についてからサラとシュウの噂でもちきりだったので、取るものもとりあえず駆けつけてくれたらしい。

「まあ、悪いことになってなくて安心したぜ」

4日ぶりにあうガイラスは、苦笑しながらサラとシュウに握手を求めた。

「いろいろな噂が駆けめぐってますね」

グレイズも笑いながらいった。

魔獣退治や王からの褒賞もそうだが、やはり一番の話題は、サラの魔術書の「大人買い」だった。

まとめて1800枚もの金貨で350冊もの魔術書を一括して買ったサラは、その容姿もあって、

「どこかの王族のお忍びではないか？」と噂されていた。

となれば、シュウはそのお付きの従者である。

その話をガイラスとグレイズがおもしろおかしくするので、サラはずいぶんご機嫌になり、シュウはちよつと落ち込んでいた。

シュウの落ち込み方がおかしくて、困む3人はますます喜んだ。

「せめて姫の騎士とかならまだなあ」

シュウは嘆くが、やはりシュウの格好がどう見ても騎士ではないため、異国の従者にしか見えないのだろう。

本人たちは気づいていないが、実は、口が達者なシュウがいつも、交渉ごとや雑談に応じていることも、シュウが従者だと見られている原因ではある。

お姫様は、微笑むだけで無口なものなのである。

「でも、シュウ君が従者だったらわたくし、道ならぬ恋の逃避行もよろしくてよ？」

「こいつはごちそうさまだ」

そういつて3人はまた盛り上がっていた。

ガイラスとグレイズは、その後3日ほどしてレリウに向けて旅立っていった。

帰りも荷の多くなる一行のため、レリウまでの護衛を捜して回るガイラスや、レリウや途中の街で仕入れた荷物を売りさばき、帰りの便で必要になる日用品の仕入れに走り回るグレイズに、シュウはずつついて回った。

生々しい商人同士の戦いは、シュウには大変学ぶところが多かった。

別れの日、ガイラスはいつものように磊落らいらくにシユウとサラに別れを告げたが、グレイズは眼を真っ赤に腫らし、別れを惜しんでくれた。

「いつかまた、こっちに訪れることがありましたら、是非私たちを訪ねてください」

グレイズは二人の手を取ると、名残惜しそうに馬車に戻っていった。

「……いい人たちだったね、シユウ君」

見送る馬車が入混みに紛れた後、サラは、そういった。

服の納品も済み、最後の食料品の買い出しも終わると、サラとシユウは、最後の別れに王城に向かった。

騎士団の控え室にアルノルを訪ねると、彼もまた、旅立つ二人に名残惜しそうに別れの言葉をかけてくれた。

しばらくすると、まあ王城内ではあるが、王もお忍びで別れに来てくれた。

「これが約束の手形だ。まあ友好国ではそなたらを守るであろう」
手のひら大の、頑丈な鉄に、純金のメッキが施された、非常に贅沢な手形だった。

そこには

ノイスバイン王である

エガルド・サリガル・アデラル・ノイスバインは

以下の両名の友に対し

身分を個人的に保証する

サーラ・ヨハンセン

シュウ・タノナカ

その要があれば随時

ノイスバインに照会を許す

貴国における両名への配慮を求める

と記され、その下には、王のサインの打刻と、王家の紋章のレリーフが彫り込まれている。

貴族でもなんでもない二人にとって、この贈り物がどれほど彼らを守るのか、計り知れないのは容易に想像が付く。

「ありがとうございます。このご恩は忘れません」

二人は、はじめてあったときと同じように、王に立礼した。

二人が去った後、アルノルはふと、王に漏らした。

「惜しいですね。この国に留まってくれれば」

「詮なき事よ。お前を破ったあの少女だけであつたなら、あるいは予の臣下に加わつたやも知れぬが……」

王は、騎士団の控え室から立ち去りながら、アルノルにいった。

「あの少年は、英雄の風がある。到底、予では扱えまいよ」
だからこそ。

エガルド王は、『友』などという、国王が使うには大それた呼称で二人を遇したのだ。

二人は、シュウが買い込んだ地図で、やっと自分たちの現在位置を把握した。

いわゆるゲーム開始直後の起点になる『始まりの街』レオナレルは、この大陸　　レジナレスのほぼ中心にある。

シュウはそこから南西に、サラはそこから北西方向にクエストイベントをこなしつつ進んだため、南東にあるノイスバイン王国については、ほぼ名前さえわからない状態だった。

とりあえず二人は、旅の目的地をレオナレルに定め、馬車を進めることにした。

王都から西に4日、小都市サステオまでは、毎日宿のある順調な旅で、二人は、観光気分で旅路を楽しんでいた、のだが。

ああ、ナビが欲しい。

サステオから旧街道を北上し、次の村で一泊、と考えていた二人は、どうやら道を間違えたのではないか？という状況に置かれていた。

なんせ、未舗装の道には雑草が生え始め、どうやらもう数年は、ここを人が通っていないのではないかと思われる風景になってきたのだ。

ここから引き返してもどうせサステオに着くまでには夜までに間に合いそうにない。

ならばもう少しだけ進んでみて、ダメだったら、野宿しよう。

二人はそう話しいい、人気のない荒れ道を北上していった。

目の前にその村が見えてきたのは、もうすっかり日も暮れて、空がわずかに青紫の光が残るほどの時間だった。

「廃村かな？」

「……廃村ね」

村には全く明かりが見えない。

いっそ、まだ草原などのほうがマシだろう、というくらいに、無人の荒れた廃村というのは、精神的に来るものがある。

「しょうがないから、今日はここで一泊しませんか？」

シユウはそういうが、サラはかなり保護欲をそそられる瞳で、恨めしそうにシユウを見つめている。

上目遣いできらきら光る責めるような瞳で見られたところで、そろそろ馬を休ませてあげないと、とシユウは思っている。

いずれにしても、この状態で動き回る方がよほど危険だとも思う。

「では、ここを今日のキャンプ地としまーす」

シユウは、言い切って馬を止めた。

村の中心は石畳になっていて、今は枯れているが、昔はここに共同の水道でもあったのだろう、という遺構が残っている。

建物の荒れ方からしたら、ほぼ数年は無人になっているのではないかと思われる。

シユウはカンテラをアイテムガジェットから取り出し、ちょっと見て回ろっかと思ひ、サラを誘ったが、

「いや、ぜったい、いや」

と、強い口調で拒否された。

馬車の中は明るいし、春真っ盛りの今の季節なら本当に過ごしやすいので、とりあえず、王都で買った結界の魔法石で馬車を包み、シユウ一人で付近を見て回ることにした。

シユウは、馬屋があったらいいな、と考えているのだ。

馬という動物は、大食いだ。草食ということもあるのだが、やはり大柄な肉体を維持するために、大量の飼料と水を必要とする。

今までは、宿の下働きにチップを与えることで、ずいぶん楽をさせてもらってきたが、こうなると、自分で何とかしなくてはならぬのだ。

付近をいろいろ見て回ると、元は宿屋だったらしい建物の裏手に、干し草が残った馬小屋があるのを発見した。

シユウは、その干し草を一抱えほど抱きかかえると、アイテムガジェットに放り込んで馬車に戻る事にした。

それにしても、なぜここは廃村になったのだろう。

見た感じ、どの建物も古いし荒れてはいるが、火事や災害といった原因で破壊されているとは思えない。

人為的に壊された跡もないので、おそらく住民は、一斉にこの村を離れたのだろう。

考え事をしながら馬車に戻ったので、すっかり結界石の解除を忘れてしまった。

激しい警戒音にシユウは驚いてあわてて結界石をとめると、おそるおそる馬車のほうに振り返った。

半ベそをかいているサラが、泣きながら怒っていた。

「バカっ！」

「……ごめんなさい」

「でもサラさん、何がそんなに怖いんですか？ お化けとかそっちですか？」

さらはびくつと肩をふるわせた。凶星か。

「サラさん聖騎士でしょ？ 祝福とか解呪の魔法使えるんじゃないですか？」

「それはそうだけど……トラウマなのよ」

VRMMOは比較的、グロ・恐怖表現には厳しい規制があるのだが、RPGではやはり若干、そうした表現が含まれる。

スケルトンやゾンビ、ゴーストにリッチなど、死霊や死体そのもののモンスターも数多く存在する。

おそらく、そのあたりが苦手なんだろうなあと思われる。

「でも、お化け系出たら僕は全く役に立ちませんよ?」

シユウは侍なので、剣士系スキルばかりである。

まあ、退魔系の剣もあるにはあるのだが。

アイテムガジェットから干し草を出し、馬の前に山積みする。

飼い葉桶に水を入れたいのだが、ここは水路が枯れていて、どうしたらいいかわからない。

そういえばいくつか井戸もあつたようだが、こんな状態の村の井戸など、怖くて使いたくない。

「サラさん、たとえば、魔法で水とか作れませんかねえ?」

「出来なくもないかも。ちよつと待つて」

ゲームで身につけてる呪文は、攻撃などに使うものばかりなのだ。サラはアイテムガジェットの中の、ほぼ魔法ライブラリとでもいふべき量の魔術書から、初級魔術の本を引っ張り出し、ただの水を出すウォーターという呪文を読み始めた。

シユウは、枯れた水路に飼い葉桶を二つ用意し、サラの呪文を待っている。

「よし、じゃあやってみようか」

サラがもにもよもよ呪文を唱え、<ウォーター>!と唱える。
どぼー。

シユウのふくらはぎあたりまであふれた水で、彼は下半身水浸しの目にあっていた。

「もう少し、加減を覚えましょうか?」

「ごめんなさい……」

とりあえず2個の飼い葉桶に水をなみなみ入れると、馬たちの前に置いていく。

シユウは、とりあえず靴とズボンを履き替えると、それぞれ簡単にすすいで、馬車の後部の壁に干しておいた。

この頃シユウは、王都で買いそろえた普段着をよく着ている。

侍の装備である羽織袴はやはりこの辺では目立つし、けっこう洗うのに気を使うので、何着か普段着を買い込んでおいたのだ。

やはり、シャツにズボンのほうが楽だというのもあって、もうすっかり見た目は、サラの従者である。

「シユウ君、魔法覚える気はないの？」

馬車の中で食事をしてると、サラが不意にそんなことを言い出した。

「ない訳じゃないですけど、もともと、パラ全く振ってないですからねえ」

実際は、キャラレベルも高いしスキルレベルでも自然と魔力値は上がるので、全く素養がないわけでもないが、シユウはボーナスを素早さや強さに極振りするのが好きだったので、あまり魔法については考えたことがなかった。

戦闘はギルドのメンバーと共同して行うのみだったので、全く必要がなかったということもあった。

「でも、せつかくだから少し覚えた方がいいですよね」

強力な回復・防御・解呪などの僧侶系スキルをサラが持っているとはいえ、現状たった二人の旅だ。

防御魔法や回復は最低限覚えておきたいな、とシユウは思った。

「じゃあ魔術書、時々貸してくださいね。勉強してみます」

とりあえずは、ヒール系とレジストやプロテクト系かな、あ、ウオーターやただのファイアとかも便利そうだ。シユウはそんなことを考えた。

食事も終わり休み支度をしていると、村の南側から、いやな気配を感じることにシユウが気がついた。

馬が時折鼻を鳴らしていることから気がついたのだ。村の外の草原で、ざわざわと何かがうごめく気配があるのだ。

「サラさん、夜襲されるかも知れません」

サラは気がついていなかったのか、何かいいそうになったので、しつ、と、口に指を当ててシユウが続けた。

「感じではゴブリンっぽいですが、暗いんで何とも言えません」
先ほどまで月が出ていたのだが、どうやら雲に覆われてしまったのか、今は、馬車の窓から漏れる光が届く範囲がつつすら明るいだ
けだ。

「サラさんは馬を守ってもらえますか？ もし攻めてきたら僕が一人
で対処します」

シユウは、外していた装飾品を身につけ、使い慣れた刀を用意し
て、馬車から静かに降りると、気配のした南側に回り込んだ。

サラも、スカートの普段着からズボンと白銀のプレートアーマー
の上部だけに着替え、ドラゴンスレイヤーを腰に佩いて、そつと馬
車前部の扉から御者台に移る。

南側の村はずれから、ついに動き出した物音がはつきりと聞こえ
てきた。

シユウは炎の魔力石を取り出し、南の道沿いに投げつけ、爆ぜさ
せてみた。

急激に明るくなった周囲に、敵の姿が浮かび上がった。

「オーガだ！」

シユウは、サラに届く音量で伝えた。

この村が廃村になった理由はわかった。

オーガが巢を作ったのだろう。

ゲームでは比較的序盤に巡り会うオーガだが、小型のゴブリンに
比べると、2メートルを超えるような巨体に強い筋力を持ち、武器
も重量級のアククスや棍棒、時には人から奪った槍やモーニングス
ターなどを使ってくる、一撃をこちらが食らえばやつかない存在だ。
この暗闇の中で、夜目が利くのか、明かりをもたずに集結してき
ていた。

一瞬の光で見えたのは5体。

だが、仲間を呼ばれていれば、どのくらい来るかわからない。

シュウは、刀を抜いて、考える。
よし、とりあえずアレは全滅させておこう。

オーガたちは、一瞬激しく燃え上がった炎で、暗闇になれていた目をつぶされていた。

再び目が効くようになった瞬間、目の前に自分たちの獲物だと思っていた人間が抜刀して立っていたのに気がついた。
先頭のオーガはその瞬間に、首を切られていた。

殺気に反応して一気に散開したのは、オーガにしては出来すぎだとシュウは思った。

こいつらは、たぶん人を襲い慣れている。

向かって右手にいったオーガをシュウは狙った。

相手の気配はわかるが獲物が判断しづらい。

とにかく、一撃でも食らえばこっちの命が危ない相手だ。

間合いぎりぎりですシュウは2匹目のオーガの足を狙った。

「グオー！」

痛みのために奇声を上げるオーガがとっさにしゃがんだところで、こいつも首を刎ね上げた。

さて困った。暗すぎてシュウにはあまりにも不利だ。

さらに二つ、炎の魔法石を取り出し、いまオーガたちが居ると思われる場所に投げてみる。

ひとつは思惑通りオーガに当たって燃え上がる。

だがもう一つは、何も無い土の上に落ちて燃え上がった。

後ろ！

棍棒を振りかぶって今まさにシュウを殴ろうとしてるオーガを、下袈裟に切り上げる。太った腹の皮を左下から切り裂かれたオーガは、はらわたを吹き出しながら崩れ落ちた。

悪いが止めは刺してやれない。

火を消そうともがく一体を除き、おそらくどこかにもう一体。居所がつかめない。シユウは、はじめてに近い恐怖の冷や汗を全身に感じていた。

どうする？ 家を燃やすか？ とにかく明かりが欲しい。せめて、あとわずかでも目が効けば。

ジャリ、足音が聞こえた。

たぶん一息ではシユウに届かない間合い。助かった。

シユウはその瞬間、一気に加速し、ひどいやけどを負っているオーガを左肩から斬り伏せ、アイテムガジェットから一振りの槍を取り出した。

斬馬刀は鞘を抜く間が間に合わない。

この瞬間生死を分けたのは、月にかかっていた雲が切れたことだった。

残り一体のオーガに思ったより間合いを詰められている事とっさに悟ったシユウは、右手の刀をそいつに投げつけた。

オーガの右手に刀が突き刺さるが、死にものぐるいのそいつは、なりふり構わず棍棒を持ち替えシユウを狩りに来る。

棍棒の長さ、槍の長さ、ほんの30センチほどが勝負を分けた。

オーガの棍棒はシユウの鼻先をかすめて外れた。

シユウの槍は、オーガの心臓を貫いていた。

ほっとしたのもつかの間、道沿いに、たいまつを持つ何者かが近づいてくるのが見えた。

20は軽くいそいだ。残念ながら、援軍ではあるまい。

シユウは、斬馬刀を取り出し、鞘から抜くと、その鞘を格納する。やむを得ない。月が晴れている今を逃せば、もうあの数のオーガには勝ち目がないかも知れない。

馬車に近づかせれば、敵に広い場所を与え、こちらは守るべき弱みが増える。

ならば、このまま突撃するしかない。

斬馬刀を右下段に持ち、シユウは一気に走り出す。

オーガたちもそれを察し、縦長に歩いてきた列を崩し、取り囲もうと散開していく。

最初の一閃で目の前の5匹のオーガを斬った手応えがある。

だが、まだ残りは10匹以上いるだろう。

右足を引き、もう一度右下段に戻る。

左後ろに散ったオーガが、シユウに向かって棍棒を投げつけた。

よきれず、シユウの左肩から背中にかけて、手ひどい衝撃を食らった。殴られるよりいくらかマシだが、呼吸が止まるほどのダメージを受け、シユウは一瞬前のめりにふらついた。

その隙を突こうと、一斉にオーガが襲いかかってきた。

「オオオー！」

周囲を揺るがすほどに激しい気合いがシユウの喉をふるわした。

その瞬間、萎えかけていた全身の筋肉が力を取り戻す。

不自然な姿勢から力任せに繰り出す斬馬刀の一閃。

さらに、背後に回ってシユウに棍棒を投げつけたオーガに対し、斬馬刀で突きに入る。

腹に切っ先が食い込んだ瞬間に、刀をこじる。

肉をえぐる感触が手に伝わった瞬間に、刀の重さを活かして一気に斬り下げる。

「ギユオー！」

苦悶の叫び声がオーガから上がった。

残りは5匹。

修羅のような形相のシユウは、自らの痛みを超える興奮で体を動かす。

肉体の限界に近い運動を全身に強いる。

数歩で間合いに入ったオーガを、斬馬刀の一振りですり捨てる。

右から左に振ったため生まれた隙を突こうと槍を振り下ろすオーガに対応するため斬馬刀をそのまま捨て、脇差を抜いて、そのオーガの槍を紙一重でかわし、左に流しながらオーガの腹を割く。そこで振り返ると、その脇差を、最後のオーガに投げつけた。

脇差は、最後のオーガの腹にそのまま刺さった。

アイテムガジェットからまた一本、槍を取り出し、そのオーガの首を突き貫いた。

そのまま槍を放すと、最後のオーガは、そのまま硬直し、後ろに倒れた。

くそ、身動きが出来ない

少し力が入っただけで、激しい痛みが背中を走る。

まだうめき声を漏らすオーガがいる。

止めを刺したいのだが、もはや体が動かない。

月が完全に姿を現した。

南に延びる荒れ果てた街道に、巨大な気をまとった何かが見れるのをシュウは悟った。

ゆっくりとした足取りで近づいてくる巨大な獣。

月光にきらめく銀の体毛。

「銀…魔狼」

4つ足の状態でも、シュウの身長ほどもあろうか。酷薄な殺気をまとって、ゆっくり、シュウのほうに近づいてくる。

銀魔狼。他者の命で生きながらえる、食物連鎖の頂点に間違いなく君臨するだろ魔獣。

レジナレス・ワールドでは、特殊ボス扱いだったろうか？存在は知られていたが、攻略はされていなかったろう。「伝説」級の化物が、いま、シユウの目の前にいる。

こちらに向かつて歩きながらも、好奇心に満ちた恐ろしく賢そうな双眸を、シユウに向けて光らせる。

黄金色のその瞳は、わずかな光を受けて、闇の中でグリーンワールドに輝いている。

ただ歩いていてもあふれ出るような殺気は、その歩みの美しさ、一切無駄のない華麗な狩猟者のハントが完璧であることの裏付けだ。姿を隠し、相手をだまして命をかすめ取る必要など何もない、王者の矜持だろう。

ほんの一瞬体重を沈め、銀魔狼は跳躍した。

ああ、食われるのかな？

シユウは茫洋とその光景を見ていた。

ガフツ！

銀魔狼に首を噛まれたそれは、断末魔の叫びさえ上げることが許されなかった。

頭を食いちぎられたそれは、見苦しくはいずり回っていた肉体を、そのまま一瞬痙攣させて止まった。

ペツ。

銀魔狼は、不機嫌そうに噛みちぎった頭をはき出す。

そして、そこにいる黒髪の少年を見下ろした。

そして、ゆっくり、口を開いた。

『坊や。詰めが甘いのう』

銀魔狼は、シユウの襟首をくわえて、ゆっくり立ち上がった。無理矢理つるされたことで、シユウの顔が再び激痛にゆがむ。そのままゆっくり、シユウをくわえたままの銀魔狼が、街の中へ入っていく。

その光景を、茫然としながら、サラが見つめている。

銀魔狼はそっとシユウを地面に降ろすと、サラに向かって言い放った。

『小娘、何をしておる。さっさと癒さぬか』

「……………」

サラは、硬化の魔法から解き放たれたようにシユウの元に走り寄り、<ヒール>をかけ続けた。

ちらつと銀魔狼に視線を移す。

一瞬その巨体が揺らいだかと思った瞬間、目の前に、唐突に全裸の美女が現れた。

長く美しい銀色の髪が、月の光を受けて美しく輝く。

抜けるように白い肌は、完璧に整った魔性のプロポーションを持っている。

背丈はサラよりほんの少し低い。だが、恐ろしいほどの威圧感が全身からわき上がっている。

そして、その瞳は美しい黄金の輝き。間違いない、あの銀魔狼だ。「小娘、我に服を貸すがいい。何をしておる？」

サラがアイテムガジェットから取り出した服を、銀魔狼は当たり前のように受け取ると、慣れた手つきで身につけていった。

おそらく、人に化けるのははじめてではないのだろう。サラは思った。

「坊や、気がついたか」

「……………あなたは」

サラがシュウの身を起こすのを手伝う。

「お前らが銀魔狼と呼ぶ狼よ」

銀魔狼は愉快そうに喉を鳴らす。

絶世の美女でありながら、そのさまは明らかに、肉食獣そのままだ。

「助けていただきましてありがとうございます。僕はシュウ。こっちはサラ」

「お前らなんぞ坊やと小娘で充分だわ」

「はあ…」

「お前のせいでオーガの頭なぞ口に入れてしまった。口直しをよこせ」

銀魔狼は唐突に言い出す。

宿屋に泊まるつもりだった二人は、今日は干し肉くらいしか持ち合わせがなかったが、意外に喜んで食べているので、つい持ち合わせをすべて献上してしまった。

「ところで、お名前を教えてくださいませんか？」

シュウは狼に聞いてみた。

「名など無いわ。だが、坊やが我につけたいというのなら、貰ってやってもよいぞ」

「そういわれましても……うーん、じゃあジルベルとか？」

「ジルベルか、どういう意味だ？」

「えー…銀色って意味です」

「よかろう。その名を貰ってやる」

銀魔狼　ジルベルは、そういうと、シュウの右腕を取り、おもむろに噛みついた。

そして、そこから流れ出る血をすすり飲み、口を離した。

そして、自分の右腕をシュウの前に差し出した。

「さあ、飲み」

「は？」

ジルベルは、右手を一度引つ込めると、自分で二の腕を噛んだ。ブクリと血の玉が浮かび出て、一筋、ツーツと流れ落ちた。

「さあ、飲み」

よく解らないが、仕方なくシユウはその血をひとすくい、舌で舐め取った。

「先ほどの鬪気、未熟者の小僧なれど見事であった、坊や。我のつがいと認めよう」

「は？ つがい？」

「ちよつと！ なに勝手なことをいつてるんですか！」

茫然とこのやりとりを見ていたサラが、二人の間に割ってはいった。

「私はそんなの認めませんよ！」

「なんだ小娘、今見ていたであろう？ 坊やは我に名を与え、我が血をすすり、我に血を与えた。つがいの成立であろう」

「説明もしないで無理矢理やらせたんじゃないですか！」

「では聞くが、小娘に何か迷惑でもかけるのか？」

「……！！」

サラは、本質を突いた逆ねじを自然に返されて、言葉を飲んでしまった。

「ではよいではないか、なあ、坊や。いや、我がつがいとなったからには、坊やはまずかろう。シユウと呼んでやるゆえ、我に名を呼ばれるにふさわしいオスとなれ」

「は、はあ。頑張ります」

「なにシユウ君も受け入れちゃってるのよ！ そこは否定するところでしょ？」

がば、サラはシユウの頭を抱きかかえ、ジルベルに高らかに宣言した。

「し、シユウ君はあたしのものなんだから！」

しばしの沈黙が三人の間に流れた。

二人の女性の間に流れる激しい殺気にすっかり当てられて、シユウは固まってしまっている。

「小娘」

「…何よ？」

「本来我らは、つがいをオスとメスの一対一とするのが習わしだ」

「私たちもそうよ！」

「そうではあるまい。人の子らは、優れたオスであればメスの群れを囲いたがる」

確かに、この世界ではそうだろう。

現代社会から来たサラにとっては、到底受け入れられない提案だが。

「ゆえに、小娘がシユウとつがいになりたいというのであれば、認めてやらないこともない」

「ふざけないで！」

「ふざけてなどおらん。小娘、威勢がよいのはけっこうだが、我が何者が忘れたのか？」

ジルベルはゆっくりと服を脱ぐ。

サラの普段着のワンピースを羽織っただけのジルベルは、全裸になると、すぐに力を解放させた。

目の前に、巨大な銀狼が姿を現す。

「小娘、お前などその気になればいつでも食い殺せるのだ。だが、シユウとお前には確かに絆があるようだ。であるなら我は、我らの有り様を曲げてもお前を受け入れようというておる。気に入らぬのであれば、力の限り奪い合う以外になかる」

激しい殺意がジルベルの体からあふれ出てきた。

サラも、ひどく暗い殺意をみなぎらせた目でジルベルを見つめている。

「あのー」

気の抜けた声を上げて、にらみ合う両者の中間にシユウが割ってはいった。

「ちょっとお話が急すぎますので、まずは私の話をしていいでしょ
うか？」

シユウはそういって、ゆっくり両者を見つめた。

「お二人の気持ちはありがたく思います。サラさんにもジルベルさんにも僕はとても助けられていますし、恩があります。なので、まずは二人が殺し合ってもらっては、本当に困ります」

シユウは、ジルベルに向かって、

「まずは、出来ればもう一度人間の姿を取っていただけますか？」
といい、サラに向かって

「とりあえず、座ってください」といった。

ジルベルも再び人の姿を取ると、脱ぎ捨てたワンピースを着て、傍らに座った。

「まず、僕とジルベルさんが、知らなかったとは言え、儀式をした
というのは事実です」

「うむ」

「サラさんと僕が、二人で助け合い、今日まで頑張ってきたのも事実です」

「うん」

「サラさんが僕を、ええと、そういう意味で『好き』だというのは、
今日まで知りませんでした。いえ、嬉しいですよ？」

サラの眉が片方つり上がるのを見て、シユウはあわてて付け加える。

「ジルベルさんが僕を助けてくれた意味が、そういう意味だとはわかり
ませんでした。光栄です」

「うむ」

「でしたら、とりあえず、サラさん、もしつがいになるなら、お二人とも、ということではいけませんか？」

どうやらいけないらしい。サラの目は再び、怪しく光る。

「ならば、どちらともつがいにならない、というのはいかがですか？」

今度は、ジルベルが冷たく微笑みだした。

「困りましたね。そしたら二股男の僕は、死ぬしかないですね」
今度は、シユウがにやりと笑った。

「じゃあ、とりあえずしばらく三人で旅してみてもどうでしょうか？」

シユウは、いいこと思いついた、という風に表情を崩して言い出した。

「あんまりいきなりな話なんで、全員ちょっと泡食ってしまいました
が、よく考えたら、まだみんなよく知り合っていないわけですし、
もしかしたら、サラさんとジルベルさんも、仲良くなったりするかも
わかりません。」

まあとりあえず、ひとまずつがいとかどうかというのは隅っこの
ほうに置いておいて、まず一緒に旅を試してみませんか？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……よかるっ」

三者三様の沈黙を破ったのはジルベルだった。

二者の視線に耐えかねて、サラもやむなく首肯した。

「よかった。じゃあひとまずこの話は終わりでもいいですね？ 僕も
今日はちょっと限界です」

サラはやつと、シユウが先ほどまで大げがをしていたことを思い
だして赤面した。

翌朝までは何事もなく過ぎていった。

シユウの状態は昨夜よりひどくなっていた。筋肉痛や肉離れ、打ち身などは、当日より翌日の症状がひどくなることは珍しくない。

シユウの背中には棍棒を当てられた跡がはつきり赤紫に腫れ上がり、彼は寝返りさえ打てないような状況になっていた。

ポーションを飲んでみたがあまり芳しくない。

サラはしばらく、魔術書を読みふけていたが、得心したように魔術書を閉じ、シユウに向かって、新しい魔法を使い始めた。＜ハイ・ヒーリング＞である。

みるみるうちに、変色した打ち身の部分は癒されて、健康な肌色を取り戻してゆく。

「ありがとうございます、サラさん。楽になりました」

「今日はまだ寝てて？御者は私がやるから」

サラはシユウをそっと寝かしつけると、扉を開けて御者台に座った。

その後ろを、ジルベルがついて行ったのを見て、シユウは再び眠りについた。

「サラ。昨夜の私の態度は傲慢であった。詫びよう」

ジルベルはサラにいった。

サラは少し驚いた顔をしたが、

「もういい」

とつぶやいた。

「今のお前の治療を見て、我は感心したのだ。我ではシユウの痛みを除いてやれなんだ。お前がいて、良かった」

「私はあなたをまだ認められない。でも、あなたがいなかったら、シユウは今頃どうなっていたかわからない。だから、私もあなたにお詫びします、ジルベル」

サラも、小さく頭を下げた。

「でも、まだ納得いきません。私だけのものだった男を、半分奪われるような気持ちには、どうしても蓋が出来ません」

「昨夜も言ったが、我らの種族も、本来オスとメスはひとつがいないのだ。お前の言い分はよく解っておる」

ジルベルもうなずいた。

「だが、我もまた、シユウに魅せられてしまったのだ。昨夜のアレの働きは、実に見事だった。あのオーガどもは、我が眷属の巣穴を襲い、皆殺しにして、肉を食らい、奴らの住処に毛皮を干しておった」

ジルベルは、忌々しそうにつぶやいた。

「我はあの日、奴らを皆殺しにすべくあの村まで出向いた。そこで、奴らを圧倒するシユウを見た。人間ゆえ、真つ暗闇で奴らを見失いながらも、見事な腕であった」

ジルベルは続ける。

「アレは多勢に無勢ゆえに手傷を負った。我はそこで助けに入ろうかと思った。だがアレは、すさまじい闘気を発し、自らの体の限界まで力を振り絞り、再びオーガどもを制圧していった。我は思わず、見惚れてしまっていた」

ジルベルは、サラをじつと見た。

サラははじめて見る、殺気のない、真剣なジルベルの表情に息を飲んだ。

「アレが止めを刺ささなんだオーガが一匹、卑怯にも音を隠して、アレを殺そうと近づいておった。だから、我が助けた。助けねばアレは死んでおった。」

助けたからには、アレは我のものだ、そう思っておったが

サラが居らなったら、アレは昨夜命を落としておったやもわからん。

だから、我はお前を認めた。サラよ」

ジルベルは、しばし返事を待った。サラからの返事はなかった。

「それだけだ」

旅芸人の馬車は、多量の荷物を運ぶために、箱の柱が頑強で、屋根も太い梁が細かく渡してある。人間なら5 - 6人が乗っても、抜けることがないほど丈夫に作られている。

ジルベルは、御者台からはしごを伝って、馬車の屋根の上に登ると、そこで寝ころんで空を眺めた。

良き伴侶を見つけたと思ったが…ままならぬものよ。

ジルベルはそのままそっと目をつぶり、つかの間の休息を取るところにした。

シユウが目をさましたのは、サステオに馬車が着く手前だった。日中ほぼ寝ていたことになる。

体がずいぶん軽い。サラにかけてもらったくハイ・ヒーリングがずいぶん癒してくれたのだろう。

布団から起き上がり、体をひねってみる。

どうやら、肋骨にはダメージがなかったようだ。

シユウは、馬車の前扉から御者台に出ると、

「サラさん、ありがとうございます。代わります」といった。

「うん……」

サラは、ずいぶん疲れているようだ。おそらく、休み無しに走ってきたのだろう。

ジルベルは、屋根の上にいる。僕に気を使ったのか、それとも馬車が窮屈なのかな？

シユウは、そんなことを考えながら、サステオに向かって馬車を進めていった。

サステオの街に着いた。

一行はまず、例によって王国兵の詰め所に行き、北の廃村での一件を隊長らに話した。

シユウがジルベルから聞いておいた話を総合すると、まず、廃坑の跡に盗賊たちがたむろしだし、そこを狙ってオーガが攻め入ってそのまま居着いた、ということになるようだった。

そのオーガが村を脅かすようになったので、どうせすでに鉱山も失い寂れた村に残っていた人たちは、新たに西側に移住して、一から村を作り直した、ということのようだった。

それをそのまま隊長に伝えた上で、昨日、知らずに廃村で野宿し

たこと、オーガに襲われこれを殲滅したことを伝えておいた。

さすがにライダンでの一件とその後、の王からの触令ふれは心得ているようで、殺したという25匹のオーガの数に驚いてはいたが、隊長たちは丁重に一行をもてなしたものだ。

一行はとりあえず、今夜はサステオで一泊。その後、ジルベルの服や保存食糧、塩漬け肉など、旅の人数が増えたために必要な買い出しを済ませ、再び北上の旅に出発した。

なぜ廃村のほうに出てしまったのかの謎は解けた。

「こちらだの」

どう見ても側道にしか見えない分岐で、ジルベルは左折を示した。長年馬車を通った旧道は、道幅も広くしつかりした作りになっているのに対し、まだ2・3年しか経っていない新道は、通行量が少なく、まだ本格的な道に見えないのだった。

サラに聞かれると怒られそうなので言わないが、シュウにとっては、ジルベルと出会えたというだけで、死ぬ思いをしたあの日には価値があつたと思っっている。

サラとジルベルは、恋敵であると同時に、旅の仲間でもあるという難しい関係なのだが、シュウが寝込んでいる間に何かあつたのか、表面上は波風立てずに過ごしている。

一体シュウの何がジルベルのお気に召したのか、シュウ自身にはさっぱりわからない。

だがまあ、あれほどの力を持った存在が仲間として同道してくれるのであれば、心強いことこの上ない。

あとは、サラとジルベルが折り合いをつけてくれたらな、とシュウは思う。

全く男女のことに経験のないシュウにとって、この状況は青天の霹靂ひらいしだった。

今まで見たこともないほどの怪しい魅力をたたえたジルベルと、

同じマンシヨンのご近所さんとしてよく見知っていながらも、特に親しくしていたわけではない美少女のサラ。

サラに関しては、『お忍びの王女では』などと噂されるほどの容色なのは間違いない。

つまり、一個の男として、どちらの女性だけでも、もし共にすることが出来ればそれは幸福な一生といえるほどの容姿であり、才能をもった人たちだと思う。

だが、シユウはそのどちらとも関係を深めるわけにはいかない状況になっている。

シユウも、健康な青少年である。それは、性的な興味も人一倍あるし、これほどの女性たちに求愛されれば、普通であればどちらか片方でも手に入れたいと願って不思議ではない。

シユウが曖昧に濁しながらも双方を抱えていきたい理由はただ単に、一歩間違えれば命を落としかねないこの世界で、とにかく生き延びたいがためであった。

サラに対しては、一緒にこの世界に連れてこられてしまった同志という側面のほうが、今は大きい。

5日ほど北上したところで、ノイスバイン王国と隣国、ヒルゼルブルツ王国の国境の関にたどり着いた。

国境には、それぞれの国が管理する関所が砦のようにそびえていて、今はどうかかわからないが、波乱のあっただろっ両国関係をうかがわせる。

それぞれの関守にノイスバイン王から賜った手形を見せると、なかなか霊験あらたかであった。

書類作成や荷台の検分などでなかなか通してもらえず、袖の下などを通してやっと通過している商人たちの一群を尻目に、三人の馬車は、最恵待遇で通り抜けてしまった。

目指す『始まりの街』レオナレルまでは、関守によると、あと2
0日ほどの道程らしい。

ヒルゼルブルツに入って2日目の朝、関所から最初の宿屋街を出
たあたりで、シュウたち一行は、不自然に距離を開けながら同じ距
離を空けて付いてくる商隊の存在に気がついていた。

ヒルゼルブルグの王都はここから南下。シュウたちは北のレオナ
レルに向かい山沿いの小街道に行く。

後ろから付いてくる商隊は、馬車4台。明らかに不自然だった。

昼に休憩を取ったとき、後ろから来る商隊のうち、3台はシュウ
たちの馬車を追い抜き、残り1台は、シュウたちがぎりぎり見える
あたりで止まった。

今日は、あと四時間ほど進むとあるらしい農村で宿を取る予定だ
から、少しゆったり休憩を取っていた。

やがて、一息ついて出発した一行は、荒地に広がる三叉路を、
標識通り、今日の目的地、アンセリ村に向けて右に進路を取った。

「さて、まあ思った通りの展開になりましたよね……」

シュウはため息混じりに、サラとジルベルに言った。

「ずっと匂っておったからのう」

銀魔狼であるジルベルは、耳と鼻が桁外れに鋭い。

朝方からつかず離れずに彼らを追っていた人間どもの匂いを、ず
つとかぎ分けていたのだ。

もちろん、奴らが話していた声もずっと前から聞こえていた。

「よお、兄ちゃん。わかってると思うが、ここで死んでもらうぜ」
オーガを一回り小振りにしたような身なりの悪い男が、薄汚れた
無精ひげの顔に、野卑た笑いを浮かべている。

前方に放射状に止められた馬車から、手下らしき男どもがわらわ

らと、20人くらい降りてきた。

後ろの道でも、例の一台だけ遅れていた馬車が道をふさぐように止まり、そちらからも6人ほどが、獲物を手に降りてくるのが見えた。

実は、もう道行き途中で、3人はこの件について話あっていた。シユウとサラは、出来れば人間を殺すのだけは避けたいと言っていたが、ジルベルに一喝されていた。

「お前ら、人間と魔獣、どう違うというのか？」
命があるといえばどちらだって命があるし、生きるために生きている、という意味でもどちらも相違ない。

害意があるのも変わらないし、自分や大事なものを守るために、相手を殺さねばならない事情は、全く同じだ。

ジルベルが言うのはおおむねそういうことだった。

それは、サラにもシユウにもよく解っている。

それが、この世界だ。

いや。

サラやシユウがいたあの現代社会でも、実際はそうだったのではないか？

たとえば、彼らが知らないどこかで誰かが、自分たちの代わりに人間同士で殺し合ったり、護りあったりしていたのではないか。そう思った。

どちらにしても3人は、襲われたら容赦なく、殺し尽くそう、そう確認して、ここまで来ていた。

サラもシユウも、覚悟は、出来ている。

これから、人間どもを、殺す。

ジルベルは、人間どもを殺すのに狼の姿など必要ない、といていた。

しかも、武器も防具も必要ないという。

「この腕のみで充分よ」

ジルベルは、ニィっと、その美貌を残酷な笑みで崩した。

サラは、例の炎属性のロングボウを用意していた。

人間相手ではオーバークイルかも知れないな、とシユウは思ったが、いつそ、その方が良いのかも知れないと考え直した。

シユウはいつもの通り、腰の二刀に、斬馬刀だ。

山賊どもは、もはや完全にこの3人を舐めていた。

真ん中の王族にも見える女の得物は弓だった。

これは、盾を持った数人で挟み込んで無力化したらしい。

あつちの銀髪の美人は丸腰だ。逃がさないように押さえ込めば事足りる。

残る男は、防具も着けず、剣も見慣れぬ細い剣がふた振りだ。

長槍で三方向から刺せば片が付くだろう。

そう値踏みを終えていた。

この山賊どもは、奴隷攫ひきさらいでもある。

二人の女は、かつてないほど高く売れるだろう。

馬車の中身もそこそこ期待が出来そうだ。

今荷馬車に転がして持っている、山賊人生で最高の「おたから」

とあわせ、この儲けで、もう俺は一生遊んで暮らせるわな。

山賊の頭は、そう、ほくそ笑んでいた。

「とりあえず、僕らに手出しするのやめてみませんか？」

シユウは、無駄だとわかっている一言を口にした。

「命乞いかい？」

どんな集団にも、こういう軽薄な口を叩く奴がいる。

そして、こういう奴に限って、仲間の背中の後ろにいる。

「わかりました……」

シユウはため息をつくとき、アイテムガジェットから、すでに抜いて用意してあった斬馬刀を取り出し、山賊たちの三台の馬車から飛び出した連中の前に立った。

斬馬刀は、右肩に峰を置き担いで歩く。

ジルベルは、後ろで通せんぼをしている6人のほうに、気楽にということ近づいていく。

サラは、自分たちの馬を守るため、馬の前で、弓を構える。

「すみません。手加減は出来ないんですよ。皆殺しにさせていただきます」

「ほざけ、小僧！」

この集団で一番強そうかな？と思える大男が、両刃剣を片手に、こちらに走り出してきた。

その後ろから、3人の男たちが、長槍を持って従ってくる。

サラが、弓で両刃剣の男の頭を射抜く。

炎の爆発が収まった瞬間、男の頭部は爆散し、首から大量の血が噴水のように噴き出していた。

「まずい、あの女！」

山賊は、自分たちの見込みが甘かった事に気がついた。あわてて総掛かりで包囲を狭めていく。

長槍の3人の男たちは槍を水平に持ち、一気にシユウを突き殺そうと三方向から迫っていった。

山賊にしてはよく統率が取れている。もとはどこかの軍で従卒でもしていたのかもわからない。

だが、流れるように肩に担いだ斬馬刀を右下段に遷したシュウは、股を大きく割って、一気に斬馬刀を左に薙いだ。

男たちの槍の上を一閃した斬馬刀は、男たちの首、顔半分、そして肩から上を両断に切り裂いていた。

その想像を絶する酷たらしい仲間の死は、残虐な山賊たちをして恐怖に震え上がらせる。

その後ろから、顔色ひとつ変えずに、サラは弓を連射している。

サラの矢は、鏃が誰かに当たるたび、当たった部位が吹き飛んで人間の体に大きな穴を作っていく。

サラは自分から見て右手側から、一人一人、順々に、確実にしとめていく。

だが、そのサラの矢を止めるべく彼女に向かって殺到してくる山賊どもは、その場から一步も動かないシュウの斬馬刀の、銀色の旋風の餌食になっていく。

特に、射手を封じようと全身盾で迫ってきた3人の山賊はまとめて一太刀、シュウの斬馬刀に盾ごとまつぶたつにされていた。

後方であっけにとられていた山賊どもは、石つぶてや弓矢を、一気にシュウに浴びせかけた。

「<プロテクションウォール>」

サラが一詠唱でシュウの前に、魔法の物理障壁を展開する。

シュウにとんできたすべての矢・石は、その障壁に当たり、シュウの足下にパラパラと降り注いだ。

その瞬間、シュウが一気に山賊どもの許に走り込み、斬馬刀で、残らず命を刈り取った。

最後にシュウは、山賊の親玉の心臓を斬馬刀の切っ先でひと突きし、90度えぐって引き抜いた。

「ば……け……も」

親玉はシュウを睨みながらうめき、三度ほど胸に開いた穴から血

を吹き出し、死んだ。

「僕からしたら、あんたらのほうが人間じゃない」
シュウはどこか、言い訳じみた独り言を漏らした。

こうして、この一方的な虐殺は、幕を閉じた。

ジルベルが無防備に6人の山賊に近づいたため、山賊どもは武器も手にせず、素手で確保しようと歩いていった。

ジルベルは、その6人が周囲に集まるのを待って、ほんの一瞬で全員の首の骨を、両手で二人ずつ、握りつぶし、折り曲げていった。わずか数秒で、山賊が作った「通せんぼ」は壊滅した。

山賊たちの馬車には、10人ほどの男女、わずかばかりの財宝や衣類が残されていた。

男女は下着も含めはぎ取られ、手足を縛られていたので、まずは全員の縛めをほごき、服を選ばせた。

その中に一人、ひときわ美しく、この環境の中で肌に汚れひとつ浮かべていない長身の女性がシュウの目を惹いた。

エルフ。その中でももはや人というよりほぼ精霊というのに近い、ハイエルフの女だった。

彼女らの種族は恐ろしく性欲がうすいと聞く。だからだろうか、全裸であることを全く意にも介さず、最後まで衣類を取りにも来ないで、一心にシュウを見つめている。

その様子を見たサラは、自身の顔を醜悪にゆがめながら、その女に衣服を手渡した。

だが、衣類は手に取ったものの、全く動く気配さえ見せず、女は

ただ、シユウをじっと見つめている。
どろぢやら、また一波乱起きそつな気配である。

奴隷として売られる直前で開放した者の中に、土地勘がある女性
がいたのは助かった。

とりあえず、当初の目的地だったアンセリ村に向けて、一同は出
発することにした。

山賊どもの死体は放置することとして、4台の馬車はひとまず持
っていくこととした。

自分たちの馬車はサラに任せ、一台をシュウが、残りを、解放者
で馬が扱える者に任せた。

サラの横に座った地元の人に案内させ、日暮れにはなんとかアン
セリに到着することが出来た。

村の若い衆に事情を話し、とりあえず今日の宿と食事、風呂を手
配してもらった。

村に駐留している村役人は、彼ら10人の宿泊費などについて非
常に苦々しい顔をしていたので、

「彼らの費用は全部僕たちが見ますよ」

と、村人に伝えた。

村人たちは喜んだが、村役人も大層喜んでいた。

食事と入浴が終わると、元奴隷商品の一同は、宿の一階に集めら
れた。

そこで、呼び出した村役人も含め、今後の対応を話あっておいた。
まず、馬車に残された金品の所有者の確認など、村役人にたのん
だ。

そして、わずかばかりのお見舞いとして、シュウとサラが手持ち
で持っている銀貨をかき集め、一人あたり20枚ずつ手渡した。

彼らは、元の生活に帰るにせよなにせよ、いずれにしても路銀
が必要になるだろうからだ。

そして、村役人には手形で自分たちの身分を明かし、北に旅するので、何かあれば連絡をしてくれ、と言い残した。

そして、殺した山賊たちが身につけていた装備や、懐の中身などには一切手をつけていない、と、シユウはあえて言葉にした。

その瞬間の村役人の表情を見て、彼の奥底の人間性をかいま見た気がした。

だがまあ、これで山賊どもの遺体の始末はこちらにツケが回ってくることはあるまい、と、シユウはこっそりほくそ笑んだ。

山賊退治の帰りに道案内をしてくれた少女と連れだって、小柄で頑丈そうな男がやってきた。

「私たちを召し抱えていただけませんか？」

二人は、貴人に対する平民のような片膝着き礼でシユウたちの前で頭を下げ、そう話し出した。

「いや……僕たち見てのとおり危ない旅してるし、今のところ自分たちのことは自分たちでやってるからね」

さすがに、冒険者じゃない者たちは、いざというとき足手まといになりかねない。

だが、目に涙をためつつ必死に訴える二人の話聞いていて、シユウは、これはやむを得ないかなあと思っていた。

二人は同じ村の幼なじみで、こうした田舎ではよくあることだが、同じ親族同士らしい。

人口が50人程度の村ではかなり血縁が濃くなるから、まあそうした関係なのだろうとシユウは思った。

それで、その村なのだが、例の山賊どもに襲われてほとんどの者が殺され、村は略奪し尽くされたということらしかつた。

売り物になりそうだとこの二人は拉致されたので、結果として生き残ることが出来たというわけだ。

今更村に帰っても生活のめどが立つわけでもなく、かといって、

頼る当てなどどこにもないし、仕事といっても、下働きが出来るかどうかといった事情らしい。

聞けば、ほかの者たちは皆旅人や商人だったらしく、ひとまず帰るあてはあるようだった。

「仕方ないですね、明日までにちよつと考えておきます。今夜はゆつくりお休み下さい」

とりあえずそういって、二人を部屋に帰した。

そして、最後の問題に取りかかった。

ハイエルフの女性、クリステルは、救出されたあとずっと、シユウが見えるところに居続けている。

そして、話し合いが終わって一同が解散したあと、シユウの部屋を訪れて、今後のことについて話したいと言い出した。

この部屋にはサラとジルベルが同室している。

まあ別に聞かれても困りはしないだろうと、クリステルを招き入れた。

うわ、この人も近くで見ると足が長いなあ。

シユウは、胴長短足の日本民族である自分をちよつと残念に思った。

大体において、人化しているジルベルですら、自分より身長が高く、足が長いのである。

あらためて、クリステルを見やると、この女性もまた、恐ろしく美しい事にあらためてシユウは気がついた。

昼間は全裸だったこともあるので、極力見ないようにしていたので、儂い印象しかなかったのだが、こうしてみると、意外にも肉感があるなだらかな腰からヒップにかけてのラインも美しいし、サラ

ほどではないが、歩きたびにたてに揺れ自己主張する胸元も、薄着であることもあって、男の目を釘付けにするだけの威力を誇る。

サラの金髪とはまた違う、あわいシャンパンゴールドの髪は、光に透けると白く光り輝く。

耳は、人の耳よりほんの一回り大きい程度で、先端はとがっているが、さほど人との違いは感じない。

瞳の色は、うすい灰色に近いシルバー。おそらく、色素の量が少ない一族なんだろうなとシュウは考えていた。

「すいません、こんな狭い部屋なんで、ベッドにおかけいただく事になります」

一応四人部屋なのだが、狭い部屋に無理にダブルベッドを二つ置いたような構造の部屋なので、とにかく狭い。

シュウの横にサラが座り、ジルベルの横にクリステルが座って対面したが、この四人の間を人が通り抜けるのは難しいくらいに狭かった。

「それで、お話とは一体、どのような内容でしょうか？」

シュウが切り出すと、クリステルは、はじめてふっと恥じらうような表情を浮かべながら、シュウだけを見つめていった。

「わたくしを、シュウさまの側妻めかけとしていただきたく、お願いにかがいました」

ああ、やっぱりこういう話になったか。シュウは向かいに座るジルベルを見た。

ジルベルはおおかた予想が付いていたのだろう。人の悪い笑みをサラに向けてニヤニヤ笑っていた。

そつとサラを盗み見る。

表情の抜け落ちたような冷たい顔をしているが、瞳だけは強くクリステルに向けている。

だが、クリステルは、そんなサラに一顧だにせず、嫣然えんぜんと柔らかな微笑みに羞恥を含ませながら、シュウをじっと見ていた。

人生で、集中してモテる時期がある。というような話を聞いたことがある。

これまでの18年の人生で、おおよそモテたことのないシユウにとつて、ここに来てからのこの状況は、もはや自分のことではないような劇場感というか、リアリティのない状況に思えていた。

「お断りいたします」

シユウは即断した。

「それは私が他種族だからでしょうか？ それとも、なにか私に不都合でもございますでしょうか？」

断られてもまったく意に介していない風で、さらりとクリステルは言つて返す。

「いいえ。私の問題です。」

まず僕は現在、この二人の女性から求婚されていて、それを保留させてもらつてる状態です。その上女性を増やす事は考えられませんが

「それはいかがでしょうか？ わたくしは、妻にしていたきたいとは申し上げておりません。あくまで、側妻の一人としておそばに置いていただきたいとお願ひいたしております」

「同じ事です。サラさんは、なんとというか、一夫一婦の暮らしを望んでいますから」

「ジルベルさまは違うのですか？」

「我はまあ、人の子らの性さがというか、強いオスがメスを囲うのを知つておるからの」

「まあ。それではわたくしも、ジルベルさまに賛同いたします」

「なんであなたたちはそんなの？」

サラは声を荒げた。

「むしろ我も聞きたい。サラよ、なぜお前はシユウを一人のモノにしたがるのかの？」

「それが男女の当たり前の姿だからよ！ あなたの種族でもそうだって言つてたじゃない」

「お前らの種族では当たり前ではあるまい。むしろ、シユウほどのオスであれば、優れた子種を次代に残すためにも、多くのメスを孕ませる必要があると考えよう」

「……」

「我らの種族は多産だからのおう。ところで、お前一人で背負いきれるのか？　こんな世界ゆえ、子など失うは容易たやすい。お前は淡々とたくさんの子を宿し、ただ育てていくだけの女になれるだろうかの」

「子供など、考えたこともありません！」

「そうか、それはすまなんだの」

「サラさま、ジルベルさま。承知いたしました。それでは、私は側妻についての申し出は控えさせていただきます」

「ほう、よいのか？」

ジルベルは、愉快そうにクリステルを見つめる。

「ええ。わたくしはエルフですので」

「おお、なるほどの。では我もそれで構わぬかの」

「どういう事よ？」

サラは訝しげに二人に聞いた。

「わたくしたちは、あなた様が女の努めを終えたあとも、今のままの年格好でありますのよ？　あなた様が天寿を全うなさっても、おそらく今の見た目のままでいることでしょう。当然、ここも」

そういつてクリステルは、自分のお腹を撫でる。

「ですから、あなた様がどうしても、シユウさまを独り占めなさいたいというのであれば、わたくしはただお側に置いていただけで構いません」

「それならシユウ君も同じ事でしょう？　私とシユウ君は二つしか違わないのよ？」

「それは違つのおう。シユウは我の血を受け入れ、我の守護を持つ。もし我の命をシユウに流し込めば、シユウは今のまま、幾百年にわたって生きられよう」

「シユウさまが望めば、私どもの氏族にも、そうした秘技がありま

すので、エルフと共にあるお方として、数百年、ご一緒に生きる事も可能です」

サラが真つ青な顔をしてうつむいてしまったのをみて、シユウはとりあえず話を収めるべく、話を切り出した。

「とにかく、今日はこの辺にしよう。ところで、クリステルさんは、戦闘は出来るのですか？」

「ええ、こう見えてもわたくしは、世界にあこがれ、ふるさとを出た女ですから」

クリステルが言うには、彼女は、弓や剣も扱えるが、精霊魔法の使い手だと言うことだった。

魔法使いが増えるのはありがたい。

その能力から、どうしても防衛に回らざるを得ないサラのバックアップとしても、もちろん、攻撃側の意味にとっても。

「わかりました。僕にもちよつといろいろ考えさせられるべきものはありますけど、とにかく、ご一緒いただけるのは光栄です。よろしく願います」

とにかく、今夜はクリステルは、せつかく取った部屋に引き取ってもらった。

その日の晩は、シユウはほぼサラの抱き枕状態となり、男の子として非常につらく悩ましい一夜となった。だが、やはりどこか肝が据わってるのか、夜半にはすっかり寝付いてしまっていたのだが。

翌朝、例の男女の処遇を考えていたシユウは、思い立って、村役人呼び出した。

「あの山賊が使っていた馬車なんですが、一台お譲りいただけませんか？」

「ほう、それは」

「僕たちの馬車ももう手狭ですし、今回何人か同行者が増えますの

で」

「なるほど」

「今回の件では、こちらの皆様にも費えが多く大変でしょう？ 僕たちとしても、馬車を譲っていただくに当たって、金貨一枚をご用意いたします」

「！……わかりました。そう仰っていただけるのでしたら、私の権限で、お譲りいたしましょう」

やはり昨日感じていたように、この男は金に汚いようだ。

もっとも、下手に騒がれてノイスバイン王国の時のように、王宮まで出頭しろなどといわれては溜まらない。

「それと、これはお役人さまに、僕たちからの心ばかりのお礼になります」

シユウはこの役人に心付けを渡してみようと思って、サラに金貨一枚を彼の手のひらに置いた。

「こ、これは過分な」

「いえいえ、これからなかなかお骨折りな作業もおありでしょう。お役立て下さい。

僕たちは、大変申し訳ありませんが先を急ぐ旅路です。お手伝いできないお詫びとしてお受け取り下さい」

「では、かたじけなくいただいております。馬車のほうは、あの一番大きいのをご利用いたしますので、どうかお使い下さい」

「ありがとうございます」

これで、ようやくこの村から退散できそうだ。

「あらためて紹介します。僕はシユウ、彼女はサラ。ジルベルに、クリステルです」

「わ、私はベンノーです。彼女はアルマ。必ず力を尽くしますので、お願いいたします」

結局、二人には雇われてもらうことにした。

行く先も身よりも仕事もないというのは気の毒だったし、なによ

り、純朴そうな二人なら、一緒に旅していても大丈夫そうかな、と思えたからだ。

なによりありがたいのは、二人とも、馬の世話が出来ることと、御者を勤められることがわかったことだ。

これで、サラやシュウにも自由な時間が生まれることになる。

炊事や洗濯もアルマが出来ると言うことだったので、働いてくれる彼女たちには申し訳ないが、ほんとうに楽をさせてもらえそうだと、シュウは嬉しかった。

山賊の親分が使っていた奴隷運搬用の馬車は、頑丈なのが取り柄なくらいで、あまり乗り心地も良くないし、道具も揃っていない。

ひとまず、クリステルと従者二人に使ってもらうことにして、最低限、この村で買える物資を買い込み、一行は昼前にはこの村を旅立った。

万が一ヒルゼルブルツ王国の中枢までにシュウたちの話題が伝わったときに、出来るなら、国境を越えておきたいと思ったのだ。

だが、思ったよりあの村役人の小悪人ぶりが役に立った。

ほとんど自分の手柄と言うことにして、山賊の財産やら国からの褒賞を自分のものにしたらしい。

シュウたちにとっては、ありがたいことだった。

こうして一行は、5日かけてヒルゼルブルツ王国を出て、『始まりの街』レオナレルのある神聖ネカスタイルネル国に入ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503y/>

レジナレス・ワールド

2011年11月26日05時53分発行